

リサーチペーパー（平成 15 年 12 月 25 日提出）

東京大学法学政治学研究科・公共政策 専修コース 2 年 学籍番号 26165

鷺坂 真聡

## 題目「鶴見祐輔における自由主義」

### 目次

題目・目次 1 頁

はじめに 2 - 4 頁

### 第一章 政治的人格の形成と自由主義（1885～1930）

第一節 青年時代 4 - 7 頁

第二節 政治への進出と自由主義 7 - 15 頁

### 第二章 満州事変と膨張の日本（1931～36）

第一節 日本の膨張の承認 15 - 19 頁

第二節 国際的孤立緩和のための模索 20 - 26 頁

第三節 自由主義の揺らぎとその後 26 - 33 頁

### 第三章 近衛時代の到来と敗戦まで（1937～45）

第一節 宇垣内閣流産の衝撃 33 - 35 頁

第二節 近衛時代の到来と鶴見の変化 35 - 47 頁

第三節 日米戦争に臨んで 48 - 52 頁

おわりに 52 - 54 頁

参考文献リスト 55 - 64 頁

## はじめに

共産主義と自由民主主義の体制間競争である冷戦の終焉により、もはやリベラル・デモクラシーに代わり得る実現目標としての政治体制は存在しない、という「歴史の終わり」<sup>1</sup>の議論が今日では一定の妥当性を持つに至っている。しかし、1930年代においては、共産主義・ファシズムという左右両翼からの挑戦により、自由主義思想及びそれを根底とする自由主義経済・議会政治は思想としては勿論、実際の政治・経済体制としても重大な挑戦を受けていた。国内外の情勢の激変にさらされ、自由主義の妥当性が疑われる中、日本の自由主義者はこれにどのように対応していったのだろうか。これを鶴見祐輔という政治家個人に即して考えてみようというのが本稿のねらいである。

鶴見祐輔は昭和初期から1950年代にかけて活動した政治家であり、後の評論家鶴見俊輔の父にして政治家後藤新平の女婿である。研究者の間では、1920年代の彼は新渡戸稲造門下の自由主義者として知られており<sup>2</sup>、1931年の満州事変以降日本の国際環境が悪化していくにつれて他の多くの自由主義者と同じようにその自由主義的・国際協調主義的立場を徐々に変えて日本政府の現状打破的な政策を支持していったとされている<sup>3</sup>が、鶴見個人に焦点を当てた研究の蓄積は乏しい<sup>4</sup>。そし

---

<sup>1</sup> Francis Fukuyama, "The End of History?" *The National Interest*, summer 1989.

<sup>2</sup> 例えば、三谷太郎『新版 大正デモクラシー論』(東大出版会、1995年)30頁や、伊藤隆『昭和初期政治史研究』(東大出版会、1969年)123頁など。

<sup>3</sup> 中見真理「太平洋問題調査会と日本の知識人」『思想』1985年2月号。

<sup>4</sup> 彼の政治生活全般をフォローした本格的な伝記は存在せず、鶴見の近親者や友人知己による回想集として、北岡寿逸編『友情の人 鶴見祐輔先生』1975年が存在するのみである。

菅見の限り、鶴見個人に関連する学問的研究はわずかに以下の七点のみである。

藤野正「昭和初期の「自由主義者」 鶴見祐輔を中心として」『日本歴史』415号1982年

鈴木麻雄「鶴見祐輔の対米観 移民問題を中心として」『法学政治学論究』第6号1990年

松井慎一郎「鶴見祐輔と川合栄治郎 交友三十三年」『文学研究科紀要』44第4分冊1998

上品和馬「鶴見祐輔の「宣伝」活動」『渋沢研究』15号2002年

上品和馬「鶴見祐輔の中国論」『アジア文化研究』第10号2003年

石田雄「昭和初期の「自由主義」論議」『日本の政治と言葉』(上)東大出版会、1989年

片桐庸夫『太平洋問題調査会の研究』(慶應大学出版会、2003年)

は総論的なもの。は移民問題に焦点あてたもの。は鶴見の思想について有益な情報を含む。は講演の事実を丹念に調べ上げたもの。は対中観に於ける経済主義的見方を強調。は吉野作造から河合栄治郎にいたる過渡期の思想として鶴見や上田貞次郎の「新自由主義」を位置付けたもの。は太平洋問題調査会の活動を追ったものであり鶴見についての興味深い記述を含む。

て、その数少ない先行研究も、彼が元来「自由主義者」としての側面と共に「帝国主義者」としての側面を併せ持っていたのであり、時勢の変化によって後者がより顕在化していったことを指摘するものや、対米関係論から説明しようとするものに留まり<sup>5</sup>、なぜそのような変化が起きたのかを環境の変化と彼の内面の論理の相互作用から丁寧に説明したものはない。特に不十分なのは、彼の国内政治観と国際政治観の密接な関係を指摘したものがない点である。その結果、彼個人の政策体系の変遷を内在的に理解するという作業は等閑に付されてきた観があり、1930年代に日本が現状打破的になったのを専ら「人口問題」解決の視点から追認したかのように説明されてきた。確かに、鶴見は官僚組織においても政党においても大きな権力を行使した訳ではなく、現実の政治過程に直接及ぼした影響力がさほど大きくないため、このような研究の現状もやむをえないと言える。しかし、新渡戸門下の筆頭であり、昭和戦前期の代表的な知米派・自由主義者の一人であり、しかも断続的な浪人生活の期間により、比較的自由的な立場でアメリカに関して発言ができた筈<sup>6</sup>の鶴見がなぜ1930年代の国際・国内環境の変化に対応して大きく自己の立場を変えざるをえなかったのかを考えることの意義は小さくないと考える。

以上要するに、本稿の目的は、まず鶴見祐輔個人に焦点をあてて狭義の思想以外の内政外交をも含む政策の体系として「自由主義」を定義した上で、1930年代の国内外の激しい状況の変化に対して彼がどのように対応し、そして結果として自らの所論を変えていったのかという点を内在的に理解することである。その際、第一に外交政策論特に対米関係論に重点を置いて考えてみることにするが、その理由は単に彼が自他ともに認める米国通であっただけでなく、「半生を日米親善の為に捧げたる我が身也<sup>7</sup>」というように対米関係調整への貢献に自らの政治生命を賭けていたからである。また、第二に鶴見の国内政治認識についても必要な限りで言及するが、それは鶴見が日本は常に「外からの刺激によつて国内に変化が起つてくる<sup>8</sup>」と考えており、国内・国際政治の相互連関を非常に強く意識していた人物であることに加えて、彼の対米関係論では日本の国内政治体制がどの

---

<sup>5</sup> 例えば、前掲藤野論文、上品前掲論文「鶴見祐輔の「宣伝」活動」では、国際環境の変化が直接的に鶴見の外交論を変えたと説明されており、結果的に真珠湾攻撃の前後で彼の議論が大きく変わった点を強調し過ぎている。本稿では第一に議会政治や資本主義の有効性についての懐疑が同程度に鶴見の外交論に影響したと考え、第二に彼の一貫した南進論が表れた側面が強いと考える。

<sup>6</sup> 太田雄三『<太平洋の橋>としての新渡戸稲造』(みすず書房、1986年)は、新渡戸が満州事変擁護の論陣を張るに至った大きな原因を彼が実質的に政府特使のような役割を担っていた点に求めている。136頁。

<sup>7</sup> 『鶴見祐輔日記 1941年』昭和16年1月29日条。(国会図書館憲政資料室所蔵『鶴見祐輔関係文書』書類の部3784)。以下、「鶴見文書・書類3784」という様に略記することとする。

<sup>8</sup> 長谷川如是閑・丸山真男・荒畑寒村・中島知久平・鶴見祐輔他「日本の運命(2)興敗の岐路」『世界』昭和25年3月号50頁。

ようなものであるのかが非常に重視されていたためである。以下、第一章では彼の人格形成過程を追いつつ、鶴見における自由主義の内容について考察する。そして続く第二章では 1930 年代前半の内外の環境の激変の中で如何に鶴見の自由主義が揺らぎ、変容していったかを分析する。第一・二節は外交政策について扱い、第三節では思想や国内政治観について扱う。最後に第 3 章ではまず政治家宇垣一成への鶴見の着目を追う事で、宇垣内閣流産によって鶴見の受けた衝撃を解き明かし、ついで時代の大きな転換点となった近衛内閣成立に対応して鶴見の立場が大きく変化したことを示す。さらに、その後の対米開戦から敗戦に至る過程での鶴見の思考を簡単に追うことで、20 年代以来の鶴見の議論の変遷を総括する。終戦まで議論の射程を延ばしたのは、この満州事変から敗戦にいたる期間が鶴見の思考の変遷を考えるうえで一つのまとまりを持っていたと考える為である。そして、おわりに、では以上の議論の示唆するところを考え、鶴見における自由主義の特質を指摘してみたい。

## 第一章 政治的人格の形成と自由主義（1885～1930）

まずは、鶴見の青年期・壮年期の足跡をたどりながら、政治的人格の形成及び、彼にとって自由主義が持った意味について考えてみることにする。

### 第一節 青年時代<sup>9)</sup>

鶴見祐輔は 1885 年、群馬の紡績工場の社長の次男として生まれ、はやくに父母と生き別れた為、義兄の下で苦学して一高・東大を優秀な成績で卒業した。同期にはのちの外交官堀内謙介、斎藤博らがいた。その後は病弱な長男の代わりに弟妹を養うため、役所勤めの傍らアルバイトにも精を出す。青年期の鶴見の頭を常に支配していたのは、備中松山藩の重臣を祖先にもつ古い武士の家柄でありながら、父の紡績事業の失敗によって没落してしまった「鶴見家の再興」を成し遂げたいという野心であった<sup>10)</sup>。この時代に培われた負けじ魂と勤勉<sup>11)</sup>は彼の一生を貫いている<sup>12)</sup>。

第一に彼の人格形成に大きな影響を与えたのは、学生時代の新渡戸稲造一高校長との出会い及び、その下での人格主義と個人主義の思想の注入<sup>13)</sup>である。それまでの鶴見は同時代の青年の多くと同じように三国干渉に悔し涙を流し、日本海海戦に無邪気に興奮する「国家至上主義」を信奉してい

---

<sup>9)</sup>以下、鉄道省辞職までの経歴は基本的に昭和 3 年に書かれた XYZ「鶴見祐輔論」『日本評論』昭和 2 年 8 月号による。なお、前掲の松井論文によると、この論文は鶴見をよく知る後輩の河合栄治郎が書いたものと推定されている。

<sup>10)</sup> 鶴見憲「兄の思い出」北岡寿逸前掲書 92 頁。鶴見憲は鶴見祐輔の末弟。

<sup>11)</sup> 明治 37 年 7 月 16 日付鶴見祐輔宛池田長康書簡（「鶴見文書・書簡 1014-1」）は、鶴見の学期の成績が三位であったことを「一番八無限デス三番八有限デス」として厳しく叱責している。

<sup>12)</sup> 『鶴見祐輔日記 1941 年』昭和 16 年 7 月 14 日条によると、彼は 26 歳からの 10 年間、「大学卒業試験に失敗して自失」していたという。具体的には一高でとれた首席を逃したことを指す。

<sup>13)</sup> 新渡戸とウィルソンはジョンス・ホプキンス大の同窓生であった。齋藤真『アメリカ政治外交史』（東大出版会、1975 年）168 頁。

た<sup>14</sup>が、新渡戸はその鶴見に民主主義や一身の人格修養を重んじることの大事さを教え、国際的な視野を与えた。こうして彼は新渡戸から一身の立身出世と国家の発展を調和するものとして捉える「官僚的自由主義<sup>15</sup>」を学んだ。また殖民政策を専門とする新渡戸の影響で、内政についてはデモクラシー、外交については対外発展に興味を持ったという<sup>16</sup>。後年自らの青年時代を振り返って「我々の時代は簡単なんです。凡ての人の立っている動揺しない基礎が一つありました。それは…日本国家というものでした。<sup>17</sup>」と述べつつも、坂本龍馬や自由民権運動以来の自由主義の伝統を高く評価<sup>18</sup>しているように、国家主義と自由主義の二つの予定調和は暗黙の内に前提とされていた。

英語力に長け、才気煥発の鶴見は一高弁論部の中心的メンバーとして活躍し、将来を囑望される若者の一人であった<sup>19</sup>。明治43年に帝大を卒業した後高等文官試験に合格、内閣拓殖局朝鮮課に勤務し、翌年には鉄道院に転じている。しかし、後の回想によると彼自身は本心では外交官を志望していた。

「嘗て大学卒業の日に余ハ外交官に適せずと一致して反対したるのも同じ友人[一高東大での友人先輩：引用者注]也。而して正直なる岩永[祐吉]のみハ今日その非を認め居る也。<sup>20</sup>」

確かに、抜群の英語力と雄弁の才を備えた鶴見が樽俎折衝に当たることを以て自らの天職であるとなしたのにもそれなりの理由があると思われる。しかし、それならばなぜ彼の知己は当時「一致して反対」したのであろうか。以下に掲げる後年の知人清沢列の鶴見評が参考になる。

「鶴見君は目前の事象に、あまりに感激しすぎ、独断的なことが多すぎる。演説家が大向うの

---

<sup>14</sup> 沢田謙沢田謙「鶴見祐輔論」『現代人物伝シリーズ』第一集（銀河出版、1963年）141頁。

<sup>15</sup> 鶴見俊輔「日本の折衷主義 新渡戸稲造論」『近代日本思想史講座』第三巻（筑摩書房、1960年）210～211頁。

<sup>16</sup> 『思想・山水・人物』（大日本雄弁会、1924年）所収「自由主義について」274頁

<sup>17</sup> 長谷川如是閑・丸山真男・荒畑寒村・中島知久平・鶴見他「座談会 日本の運命(1)日露戦争前後」『世界』昭和25年2月号70頁

<sup>18</sup> 同上「日本の運命(2)興敗の岐路」『世界』昭和25年3月号50～51頁

<sup>19</sup> 例えば、鶴見の後輩で彼を尊敬していた芦田均は、「僕は今や自己自身をさへも信ずる能はざる弱者となれり…。陰に君の如き秀俊<ママ>の士の活躍を見んことを期待す」と述べている。明治43年7月11日付鶴見祐輔宛芦田均書翰「鶴見文書・書簡18-1」。

<sup>20</sup> 『鶴見祐輔日記1931』「鶴見文書・書類3772」昭和6年7月19日条。

動きを注意しすぎる癖を持つ。<sup>21</sup>」

ここから分かるのは、常に冷静沈着で表面的な動きに惑わされてはならないという外交官の理想像<sup>22</sup>からはかなり外れる鶴見の姿である。つまり、鶴見の弁舌の才能は、弁護士のように事実を下に論理的に緻密に組み立てられた議論ではなく、レトリックや節回しで聴衆を魅了し感情的な同意を得ることを目的とする「雄弁」<sup>23</sup>において最もよく発揮されたと言える。そして雄弁自体はあくまでも表現の形式であるが、その雄弁或いは講演という表現形式によって自らの主張を展開する習慣を身につけたため、彼の思考様式もそれに強く規定された。

では、雄弁を通して身についた鶴見の思考の特徴とはどのようなものだったのだろうか。まず物事を体系的に捉えることよりも印象的な分析を行うことに主眼が置かれること、及び聴衆の意識の中にある漠然とした考えを具体的に言葉にすることで共感を得ることが目指されるため、大衆の意見に迎合しやすくなることが指摘できる。しかし、最も重要なのは、一人の話し手が満場の聴衆に語りかけてこれを動かすという点に力点がおかれる結果、傑出した個人が大衆運動に乗って国を指導するというイメージが生まれたと考えられる点である。この思考様式は、組織の中で徐々に階梯を昇りながら技術や人的コネクションを養成することで権力へ接近するという路を鶴見に拒否させた。この点を抜きにしては、鶴見が一貫して大衆運動・国民運動を率いることに執拗なまでに執着し、既成組織内での上昇による道にきわめて消極的であったことを説明することは困難であると思われる。

外交官への道は諦めたものの、兎も角も鶴見が選んだのは官吏となることであった。もともと強く望んで入ったわけでもない拓殖局・鉄道院であったが、幸い語学の才を買われて何度も海外視察に赴く機会に恵まれた<sup>24</sup>。この間、鶴見に影響を与えた出来事の第一は、パリ講和会議に発つ直前のウィルソン米大統領に面会したこと等をきっかけとして、かつて新渡戸によって鼓吹された自由主義的な精神が再び高まったことであった<sup>25</sup>。1916年末に始まった鶴見の主催する一高の学生の集まり「火曜会」の別名が「ウィルソン倶楽部」とされていた<sup>26</sup>ことはその意味で象徴的である。

---

<sup>21</sup> 清沢列『暗黒日記』（評論社、1970年）第1巻昭和18年8月1日条。

<sup>22</sup> ハロルド・ニコルソン『外交』（東大出版会、1968年）第五章

<sup>23</sup> 「天下を動かす大雄弁」『キング』大正15年4月号。

<sup>24</sup> 1911年に日米交換教授として訪米した新渡戸夫妻に従って訪米し、翌12年には欧州ロシアを回る。1913年夏には万国鉄道会議のためにモスクワに赴いて数ヶ月を欧州視察にあてている。飛んで1915年末～16年2月にかけて仏印蘭印マラヤを視察。1918年～21年にかけてアメリカ、欧州などを回り講演を行なった他ウィルソン米大統領にも面会し、C・A・ピアードと相識る。1922年には中国・沿海州視察。23年にも訪中して孫文と会見。

<sup>25</sup> 鶴見祐輔「ウィルソン論」『中央公論』大正5年3月号

<sup>26</sup> 北岡寿逸「鶴見祐輔さんの思い出」北岡編前掲書63頁

そして官吏時代における、後々まで影響を及ぼすことになる重要な出来事の第二は後藤新平の知遇を得て、新渡戸の紹介<sup>27</sup>で後藤の長女愛子と大正2年に結婚したことである。これに「感激して、以来彼が万事岳父張りをもって任ずるようになった<sup>28</sup>」という。後藤のスケールの大きい発想や万事に科学的調査を重んじる思考様式<sup>29</sup>、そしてなによりも大政治家後藤の存在感に強い影響を受けたものと思われる。鶴見の英雄崇拜的な思考様式は既に、学生時代においても見受けられた<sup>30</sup>というが、その傾向が後藤という対象を得て一層強まったであろうことは想像に難くない<sup>31</sup>。

以上のように欧米や南洋に出張し見聞を広め、また、後藤との繋がりをもたらししてくれた役所勤めではあったが、一方では自由主義に目覚め他方では後藤に傾倒して出世への意欲を掻きたてられ、大衆運動を率いて立つことを考え始めていた鶴見にとって、役所勤めはいかにも窮屈に感じられるものであり、「[杓子定規な]役人派<sup>か</sup>から異端扱いをされて居る」と感じていた彼は、「裸<sup>ト</sup>なつて闘ふ<sup>32</sup>」機会をうかがっていた。

## 第二節 政治への進出と自由主義

折から貴族院議員で固めた清浦内閣が成立したのに反発して第二次護憲運動が起きていた大正13年2月、鶴見は鉄道省を退職してしまう。岳父後藤との激論の末の退職であり、「周囲の事情が之を促したのも何でもない。全く彼れ自身の内部的発酵によるもの<sup>33</sup>」であったという。東北出身で自身も強力な地盤を持たなかった後藤<sup>34</sup>の反対は、かつての自らと同様、いずれ政治家になるとしてもまずは技術官僚として官僚組織の中で力をつけるべきだと考えたためと思われる。

抑々、大正時代の後半において政治権力へ到達する道としては、かつてのように<sup>35</sup>技術官僚として頭角を現すかジャーナリスト<sup>36</sup>として言論界に力を築くものに加えて、二大政党に入って当選を

<sup>27</sup> 台湾経営を契機とする後藤と新渡戸の密接な関係については北岡伸一「新渡戸稲造における帝国主義と国際主義」『近代日本と植民地』第四巻（岩波書店、1993年）185-188頁。

<sup>28</sup> 阿部真之助編『現代日本人物論』（河出書房、1952年）72頁

<sup>29</sup> 中見前掲論文によると鶴見の思考の特徴は科学的な調査研究を重んじることであったという。

<sup>30</sup> XYZ前掲論文4頁。新渡戸がそこでの傾倒の対象であった。

<sup>31</sup> 具体的な政策で言えば、例えば後藤の旧大陸聯盟論の影響を受けたと思われるアジア聯盟論を提唱している。鶴見祐輔「現代米国が暗示する日本の新国策」『エコノミスト』4(1)、大正15年

<sup>32</sup> 昭和5年3月1日付け鶴見祐輔宛芦田均書簡（「鶴見文書・書翰18-3」）

<sup>33</sup> XYZ前掲論文7頁。

<sup>34</sup> 鶴見は地盤の欠如が後藤の一番の欠点だったとしている。「後藤新平論」『中央公論』昭和10年4月号319頁。

<sup>35</sup> 三谷太一郎『日本政党政治の形成』（東大出版会、1967年）12頁。

<sup>36</sup> 実際、鶴見は何度か新聞入りを奨められていた（国民新聞、時事新報など）が、いずれも実現には至っていない。野間清治が述べているように、鶴見には大演説を振るうことや経綸を美文で書きたてることは巧でも、泥臭い経営手腕に欠けるところがあった故と思われる。昭和4年12月22日

重ねて入閣をめざすのが一般的であった。しかし、鶴見はそのいずれをも選ばず、無所属の新人候補として立候補、24年に岡山7区から出馬して落選、26年の補選にも落選し、当選は昭和3年の第一回普通選挙を待たなければならなかった。では、なぜ鶴見は官僚を続けることも既成政党に入ることも選ばなかったのだろうか。その理由は、一つには既述の大衆運動を率いて立つことへの執着心であると思われるが、それに加えて、世界的な新しい政治的潮流である「新自由主義」が日本でも必然的に広まるはずだという確信とそのための新政党結成に自分の政治生命を賭ける覚悟を決めていたことが大きな要因であった。

しかし、「[一次大戦後に急速に力をつけた社会主義・共産主義は] いづれも理論で成功した程、実際では成功しなかつたために、世界の民心が今や、次第に社会主義共産主義から離反して、自由主義運動へ引返そうとしてゐる。この傾向は必ずや兩三年中に日本にも入つてくる<sup>37)</sup>」という鶴見の強気な読みとは裏腹に、客観的には日本における自由主義思想の全盛期はすでに過ぎ去っており、政界では二大政党が、識者の間ではマルクス主義が全盛期を迎えつつあった。

では、鶴見における自由主義の思想とはそもそもどのようなものだったのだろうか。

以下、若干長くなるが、重要な箇所なので、昭和2年2月の鶴見のメモを参照しつつ彼にとっての自由主義がどのようなものであったのかを考えてみたい<sup>38)</sup>。

「役人をやめたのも、永い間の外国旅行も、読書生活も、Liberalism を研究して、自分の一生の事業として、これを完成させ同時に日本の社会に実行したいからであつた。」

しかし、実際には彼は二度の選挙に敗れて浪人の身であり、また、若槻首相主導での三党首会談の結果解散が回避されたので今後一年は選挙がないと思われた。そこで鶴見はこの期間を利用して自由主義者の著作<sup>39)</sup>を本格的に研究することを考えた。この研究の結果、彼が掴んだ「新自由主義」は、社会的自由主義とでも呼べる概念であった。最も重要なポイントは、以下のようなものである。

「旧き自由主義八個人の自由伸張を目標とし従て個人主義の哲学を出発点としたるに反し新しき自由主義八 human progress と可いふ団体主義を目標として出発せることである。即ち旧自由

---

付野間清治書簡（「鶴見文書・書簡 529 - 3」）、 「メモ新聞経営私案」（1935年6月28日）（「鶴見文書・書類 346」）、 『鶴見祐輔日記 1931年』（「鶴見文書・書類 3772」）昭和6年5月18日条など。

<sup>37)</sup> 『太平洋時代と新自由主義外交の基調』（新自由主義協会、1929年）93-4頁。

<sup>38)</sup> 「Liberalism の研究」（1927年2月18日）（「鶴見文書・書類 302」）

<sup>39)</sup> 以下の六つの文献が挙げられている。L.T.Hobhouse, *Liberalism* Hermann Levy, *Economic Liberalism* W. Lyon Blease, *A Short History of English Liberalism* John.S.Mill, *On Liberty* John Morley, *On Comparison and other essays* McCum *Six Radical Thinkers*.



主義八個人人格の伸張個人心霊の発達個人利益の擁護を目標とし、そのために必要な社会及び国家を認めたるに反し、新自由主義八社会の進歩、人間全体の発達を目的としそのために八個人自由の主義に依るを最[も]可なりとする立場を取つてゐることである。」

つまり、鶴見においては個人の自由の拡大は、それ自体が「目的」であるというよりは寧ろ、社会の発達のための「手段」としての側面が強かったということが出来る。また、彼は「自由主義の観念と国家の観念との調和が、これからの政治思想の方向である<sup>40</sup>」と考えていた。そして、この点こそが30年代の鶴見の議論の揺らぎを考える際の重要なポイントであると思われる。ここで結論を先回りして述べるのならば、自由主義的な思想・政体が固定的な信条としてではなく、国家の発展とのバランスの中で考えられている点が重要である。従ってよりよいアイデアがあればそれを取り入れて自由主義と国家主義のバランスを若干変えることに対して比較的抵抗が少なかったのではないか<sup>41</sup>と思われる。

以上のように、日本での新自由主義実現に自らの政治生命をかけた鶴見は敢えなく落選を重ねたが、1928年2月、遂に岡山一区から当選を果たした。この時に鶴見が掲げた政治目標<sup>42</sup>は、短期的には二大政党の間でキャスティング・ヴォートを握り、新自由主義の政策を既成政党に認めさせていくことであり、長期的には既成政党及び無産党の両極端のどちらにも不満な勢力を「新自由主義」の旗の下に糾合して新自由主義政党を結成することであり、そのための準備として7人で明政会<sup>43</sup>を立ち上げた。また具体的な政策としては「言論の自由」「産業上の自由主義」「関税整理」「農業の最低限の保護」「労働者の待遇改善」「軍縮」等が挙げられており、特にこれらの新自由主義的政策の「政治的重要点」であり、全ての根本となるのは外交政策であるとされ、外交が非常に重視されていた。そして、その外交政策は国際協調を重視するものであり、二大政党の中では多くの点で民政党に近い<sup>44</sup>ものであったため、「浜口[雄幸]氏と単独会見シ正シキ政治ヲスルトイフ言質ヲ取りテ、猛然トシテ政友会内閣倒壊<sup>45</sup>」を目指した。55議会で田中義一内閣に対する不信任案が明政会が賛成すれば通過するという状況の下、尾崎行雄らと図って議事引き延ばしを図り、会期切れ

---

40 『英雄待望論』(大日本雄弁会講談社、1928年)306頁

41 勿論、これは相対的なものである。ただ、石橋湛山や吉野作造が批判を浴びつつも古い自由主義を墨守し続けたことと比べると、鶴見の議論の変遷はやはり内心の抵抗感が少なかったことを示唆しているように思われる。

42 「新自由主義の立場より」『改造』10(5)昭和3年

43 他の議員は椎尾弁匡・山崎延吉・小山邦太郎・藤原米造・岸本康通・大内暢三の六名。

44 例えば、「政友会と民政党との対支政策と余の立場」1928年(「鶴見文書・書類17」)によると基本的に対中政策においては民政党と一致している。

45 『鶴見祐輔日記 1930年』(「鶴見文書・書類3771」)昭和5年7月28日条

に持ち込むことで閉会に終わらせるという策を用い、世間の注目を浴びた<sup>46</sup>。この頃が彼の得意の絶頂であったように思われる<sup>47</sup>。しかし、ここから彼の政治生活の転落が始まった。

まず、第一に岳父後藤新平が1929年4月に死去する。鶴見は後藤周辺にいた人々を組織することでこれに対応することを試みた<sup>48</sup>。

第二に明政会が崩壊し、買収事件に巻き込まれて鶴見自身も再び落選の憂き目を見た。確かに吉野作造が後藤の政治倫理化運動や上田貞次郎の新自由主義提唱を評価したように、保守（政友会）でも革新（無産党）でもない政治運動に対して一部の支持があったのは事実である<sup>49</sup>。しかし、二大政党からの引き抜きにあって明政会の人数が減ってしまったうえ、第55議会で不信任案葬りを条件に政府側から贈賄を受けていた疑惑が浮上<sup>50</sup>。収賄容疑で実弟定雄が起訴され、鶴見本人も議員を辞職し、再起を賭した1930年2月の選挙で落選。彼が次に代議士となるのは6年後の1936年の事である。

以上、鶴見の新自由主義の思想及び政党樹立の試みについてみて来た。ここで、1920年代の鶴見における自由主義について簡単な定義を与えることとしたい。その際、狭義の思想としての自由主義のみでなく、国内政治体制や国際政治観にもまたがった定義を用いる。その理由は、鶴見自身が「自由主義の定義は社会主義のやうな、ある原則の定まつた主義ではないといふことである。自由主義とは心持ちである。自由主義的な心を持つた人々の思想や行動が、自由主義なのである<sup>51</sup>」として、「寛容と公平」<sup>52</sup>を重んじていれば自由主義者と言えるという相当に幅のある概念と考えていたからである。

思想としては「社会における人間に人格を認め、この人格の完成をもつて人類究極の目的と観ずる思想<sup>53</sup>」であり、そのための言論の自由や学問研究などを重視する。人物としてはウィルソンや

---

<sup>46</sup> 伊藤隆・広瀬順皓編『牧野伸顕日記』（中央公論社、1990年）307 - 309頁。

<sup>47</sup> 同時代の評価としては例えば、阿藤俊雄「鶴見祐輔氏」『昭和巨人録』昭和3年が、「我が国議会史上嘗て見ざる朝野二大政党伯仲対立の間に介在し、完全にキャスティングヴォートを握つて内務大臣を弾劾し、…殆ど完膚なき迄に朝野両党を引き摺り廻した」と評価している。

<sup>48</sup> 「後藤伯没後の政治的結成」（昭和4年4月20日付）「鶴見文書・書類316」には、後藤直系の永田秀次郎、新渡戸、井上準之助に衆議院の同志および院外団（次期選挙に立候補予定者）の清沢冽、沢田謙らを加えて自由主義政党結成の基礎とすることが記されている。

<sup>49</sup> 吉野作造「後藤子爵の新運動」『中央公論』大正15年5月号。同「新自由主義の提唱」『中央公論』大正15年6月号。同「自由主義提唱の弁」『中央公論』大正15年8月号

<sup>50</sup> 「明政会抱込み事件関係新聞切抜き」（「鶴見文書・書類208」）、結局は無罪の判決が出た。

<sup>51</sup> 前掲「自由主義について」『思想・山水・人物』279 - 80頁

<sup>52</sup> 同上276 - 7頁

<sup>53</sup> 同上281頁

ウェルズ、ジョン・モーレーを目標<sup>54</sup>とする。個性の自由な発揮によってこそよりよい社会が出来ると考え、従って女性への参政権付与にもかなり積極的<sup>55</sup>。

国内政治においては政治的には議会制民主主義を支持する。独裁政治や軍国主義は野蛮な体制だとみなし、男子普通選挙の実現を日本が英国に近い立憲君主制への途を歩みつつある証拠として高く評価する<sup>56</sup>。経済的には資本主義を支持するが自由放任ではなくある程度の政府の介入を容認。基本的なモデルとしては19世紀以来の英国議会政治及びそれを支えた資本主義を考えていた<sup>57</sup>。

国際政治においては国際法一般や国際連盟<sup>58</sup>、不戦条約を支持し国際協調を重視する<sup>59</sup>。より具体的な政策論としては、先ず何よりも対英米協調特に対米協調を重視する。一次大戦以降は米国が世界の中心であり、これとの協調は必須と考えた。しかし必ずしも日米関係を楽観してはならず、寧ろ不断の努力で関係調整を試みなければ関係は悪化しかねないとの危機感を抱いていた<sup>60</sup>。従って対英米協調を形にしたロンドン軍縮条約を非常に高く評価したし、また、排日移民法に憤慨して米国へ足を入れないことにした新渡戸に代わり、頻繁に講演旅行<sup>61</sup>を行い、米国の誤解を解いて両国の協調の実現のために「先生の驥尾に付して、太平洋の懸橋となる積り<sup>62</sup>」であった。中国については、ナショナリズムによって中国が統一されて豊かな国となるのを日英米が助けることが日本の利益でもあると考える。市場・原料供給地・食糧供給地として中国との関係は極めて重要だが、進出は経済的なもので充分<sup>63</sup>。ソ連については思想的には嫌悪するものの、特に一国社会主義をとり新経済政策をとってからは体制として共存可能だと見ている<sup>64</sup>。

以上が鶴見における自由主義及び自由主義的な政策の定義である。必ずしも鶴見自身がこのように厳密に定義した訳ではないが、20年代の鶴見の主張のうち関連性が強いものをまとめると概ねこ

---

54 『鶴見祐輔日記 1932年』(「鶴見文書・書類3773」)昭和7年10月22日条の回想

55 「女子公民権賦与について」『都市問題』7(3)昭和3年

56 “Japan in the Modern World” *Foreign Affairs* vol.9 Jan.1931

57 『鶴見祐輔日記 1931年』昭和6年3月9日条

58 国際連盟はウィルソンの理想の表れとみて理念的に高く評価するが、ワシントン条約は単なる政治的妥協で哲学がないとして、海軍軍縮という便宜上の意味しか認めていない。『米国民性との日米関係の将来』(岩波書店、1922年)9-10頁

59 「政治といふ観念」『太陽』33(12)昭和2年

60 『米国民性との日米関係の将来』16-8頁

61 上品前掲論文「鶴見祐輔の「宣伝」活動」47頁によると、確実に確認出来るもののみで米国だけのべ3年6ヶ月の間に300回以上の講演を行なっている。

62 鶴見憲前掲論文96-7頁

63 前掲上品論文「鶴見祐輔の中国論」、『英雄待望論』340-1頁。

64 『日本と世界』180-8頁では、新経済政策採用を「事実もう共産主義は捨ててしまった」と解釈し、過度にソ連を危険視することを戒め、共存可能だとしている。

のように整理できる。一言で表現すると、漠然と英米のような文明国になり中国と提携して東洋の平和を維持することに日本の未来があると考えていた、ということが出来るかもしれない。「[グロティウスやウェルズの世界的な精神を想起して]今や三大強国の一つとなつた日本としては世界に於ける日本人といふ位置を吾々が自覚して、自分自身を偉大にする以上に、更に世界の為めに尽すといふ一種の奉仕の精神が国家的に、国民的に起こつて来なければならぬと思ふ<sup>65</sup>」という言葉はこの雰囲気をよく表している。

逆にいえば、ここでいう自由主義的な政策が具体的にどのような条件に支えられており、どのようにすれば将来的に困難を越えて持続できるのかという点については、それほど考え抜かれていない。勿論、状況が大きく変化する以前に、自らの拠って立つ基盤を批判的に検討する事は難しいという反論もありうる。しかし、例えば清沢冽や石橋湛山等が大正年間には既に満蒙權益について仔細に検討し、その相対性をはっきりと指摘していた<sup>66</sup>ことと比べると、鶴見の自由主義は理念が先行しており、現実の問題点と理念とのギャップをどのように具体的に克服していくのかについての詰めが甘かったといえる。そしてその故に、鶴見は 30 年代に自らの自由主義的政策の条件が崩れるとこれに対応するために自らの理念を一部変化させることを余儀なくさせられていった。

既に先行研究において指摘されているように、鶴見には自由主義者としての側面と共にそれ以外の側面、具体的には帝国主義者や国家主義者としての側面もある。しかし、ここではそれを矛盾としてとらえる必要はないと考える。鋭い外交評論で知られる自由主義者清沢冽が「自由主義者の如き真面目の愛国者は多からず<sup>67</sup>」と述べたように、ナショナリズムを大事にするということと国際関係の的確な理解が出来ないということの間に論理必然的なつながりはない。石橋湛山や清沢は日本という国を大事にするからこそ、どのように国際社会と交際するのが長期的な日本の「啓蒙された自己利益」になるのかを深く考え、その観点から政府の政策を鋭く批判することが出来た<sup>68</sup>。それに対して、鶴見が些かなりともそのような現実主義的な批判をすることが出来たのは、戦争の危機が切迫した時期及び戦況が悪化した時期のみである。この比較から分かるのは、鶴見のナショナリズムの問題ではなく、鶴見が基本的に楽観的で冷静な長期的状況認識を怠る傾向があったということである。

以下では自由主義以外の鶴見の思考様式としてまず何点かを指摘したうえで、彼の議論の根本をなしていたと思われる、ある種の文明観・世界観について簡単に取り上げる。それは、これらに注

---

<sup>65</sup> 『米国国民性と日米関係の将来』 168 頁

<sup>66</sup> 清沢冽「満州に於ける『特殊地位』と日本の行くべき道」『外交時報』大正 15 年 1 月 5 日号、増田弘『石橋湛山』(中公新書、1995 年) 65 - 73 頁

<sup>67</sup> 清沢『暗黒日記』昭和 18 年 8 月 3 日条

<sup>68</sup> 北岡伸一前掲論文「新渡戸稲造における帝国主義と国際主義」

目することが30年代以降の彼の議論の変遷を考えていく際に有効であるとするのである。

まず、鶴見の基本的な政治的人格やアメリカ観についてここで纏めておきたい。第一に、彼は自らの天職を「政治家・文人・国際人」が一体となったものとして捉えていた。多くの友人知己がどれかに専念することを彼にすすめた<sup>69</sup>が「私に取つては、国際人の事業も、文章の仕事も、政治の働きも、実は別々のものでなくして、一つのものである。<sup>70</sup>」通常の政治家であれば、1年内外も講演旅行で日本を離れることを繰り返すようなことは国内での実力養成上全く不利になるため行わない。しかし、鶴見の場合には、国際的な名声を高め、それを国内政治上の力に転化しようと考えていた節がある<sup>71</sup>。第二に、すでに見たように彼は雄弁家として訓練を積むなかで、独自の大衆運動へのこだわりを持つようになった。第三に、鶴見の中ではナショナリズムと自由主義は自然に調和していたが、それは国内的には議会政治、国際的には国際協調主義が国際社会の為であると共に日本の国益にも沿うものであることを前提としていた。しかし、1930年代に入るとこの前提は自明のものではなくなっていき、それにつれて鶴見の議論も変化していく。第四に、鶴見においてはアメリカという国家は何よりも「能率崇拜」の国であり資本主義の総本山として捉えられていた。しかし、その能率重視の背後に何があるのかという哲学についてはあまり考慮を払った形跡がない<sup>72</sup>。第五に、アメリカの対アジア外交を動かす力は「実利」的な通商利害への要求と「純理」的な国際法尊重の願望の二つが交じり合ったものだと考えていた。その上で、工業国となって海外市場を求めざるを得ない今後のアメリカは「実利」的考慮が徐々に全面に出てくるので今後は理念的な門戸開放などを日本に厳しく主張することはなく、満州権益などについても十分妥協可能と考えていた。

ところで、今まで述べてきたような鶴見の全ての発想の基礎にはある種の文明観とも呼ぶべき思考様式があったが、ここではそれを仮に「海洋文明史観」と称することにする。それは具体的には以下のような議論である。まず第一に、鶴見によると、基本的な視点として民族の能力はその有

---

<sup>69</sup> 北岡寿逸前掲論文、大正8年5月15日付鶴見宛河合栄治郎書簡（「鶴見文書・書簡199-8」）等

<sup>70</sup> 「国際人と文人と政治家」掲載誌不明昭和3年9月12日付け

<sup>71</sup> 『鶴見祐輔日記 1936』（「鶴見文書・書類3777」）昭和11年8月30日条。ヨセミテの太平洋会議を終えた感想「余自身としてハ1927年のHonoluluの第二回の会議以来、初めての成功也。…国際的に余の立場をenhanceしたり。…将来の余の国際活動に充分役立ちし事と思ふ」

<sup>72</sup> 清沢冽・鶴見祐輔他「アメリカ及びアメリカニズム批判」『新潮』昭和4年6月号の中で、鶴見がアメリカは能率重視の国だと主張したのに対して、清沢冽がそれは手段であり目的はあくまでよりよく個人の力を発揮するという哲学が根本にあると指摘しているのは示唆的である。113-114頁。また、『鶴見祐輔日記 1931』昭和6年5月29日条では「米国文化の基礎は全然Business manのみにてBusiness manの目標ハProfit」という見解に「全然同感」と記している。

する土地をいかに有効活用して優れた文化を築き上げたのかで図られる<sup>73</sup>。しかし、第二に、その土地のみに安住してはならず、偉大な文明となるためには海上交通・交易のルートである海を制することが必要不可欠<sup>74</sup>であるとされる。なぜなら「全世界の文明の中心となるに＜ママ＞は交通の中心となると否とによつて岐るるものである<sup>75</sup>」から。そして第三に、基本的に富源は暖かい南の地方にあるものであり優れた民族は南へ進出していくものだとされたため、南進は政策的な合理性とは無関係に望ましい目標であると考えられていた<sup>76</sup>。そして帝国主義の時代には政治的な拡張が望ましいと考え<sup>77</sup>、20年代には経済的な拡張が望ましいと考えた。

以上のような海洋文明史観から導かれた、本稿の扱う時期における鶴見の一貫した時代認識は次のようなものであった。まず、古典古代はギリシャ・ローマが地中海を征して栄えた「地中海時代」であり、近代前半は欧州とアメリカが顔を合わせる大西洋が世界の中心である「大西洋時代」であった。しかし、第一次大戦によって欧州の衰勢が著しい今や、日本と米国という世界の強国が対面している太平洋が世界の中心となる「太平洋時代<sup>78</sup>」を迎えた。そこでは日米英ソ中の関係、中でも人口4億人の潜在的な巨大市場である中国をめぐる日米関係の有り方が極めて重要な論点であるとされた。

海洋文明史観という壮大な認識枠組みを持ったことによって鶴見の政策論には一定の方向付けが与えられた。第一に、優れた民族が狭い土地に押し込められていることは不合理である為に、欧米列強は人口の圧力によって膨張する運命にある日本に対して移民の自由と通商の自由を認めることが正義であるという人口問題解決への強い意欲<sup>79</sup>である。第二に、日米が太平洋を挟んで相対峙して互いに中国市場への参入を欲しているという状態があるために衝突の危険があるが、米国の力は極めて強大なものであるために日米の衝突回避が至上命題と考えられた。第三に、認識枠組みの基本的な部分で、100年単位の極めて壮大なスケールの世界観に影響されているために、逆に目の前の事象が現在の政治外交にどのような意味をもつのかを丁寧に分析することがしばしば等閑視されることとなった。同じ理由で彼の政策論にはしばしば所謂「歴史の教訓<sup>80</sup>」が散見される。従っ

---

73 『現代米国論』（日本評論社、1931年）1 - 3頁

74 「世界の中心は倫敦より何地へ」『鶴見祐輔氏大講演集』大日本雄弁会講談社、1924年

75 同上 45頁

76 最初の単著である『南洋遊記』（大日本雄弁会、1917年）5頁では「自分は敢えて南へ！とは謂はない。日本民族膨張の方向を南のみに局限すべき理由は毫末も無い」としているが、鶴見の政策論の変遷を追えば直ちに分かるように、南進論は彼の議論の中では数少ない終始一貫した議論の一つであった。

77 『南洋遊記』650 - 1頁

78 『米国国民性と日米関係の将来』146 - 8頁

79 「人口問題の解決策」『経済往来』大正15年7月号

80 アーネスト・メイ著、進藤栄一訳『歴史の教訓』（中央公論社、1977年）

て、いささか逆説的ながら、中長期的な文脈の中に情報を位置付けることよりも、目前の出来事に一喜一憂することが多かった。

## 第二章 満州事変と膨張の日本（1931～36）

まずは第一節・第二節で満州事変以降 1936 年頃までの鶴見の対外政策論を考える。第三節では鶴見の国内政治論・思想の変化について考えるものとする。

### 第一節 日本の膨張の承認

近代日本外交の最も大きな転換点の一つである 1931 年の満州事変に対し、やや意外なことに、鶴見は殆んど抵抗感を感じた様子がない。これは当時の日本人の大多数の事変礼賛の論調を考えれば理解できることではある。しかし自由主義者の間では、例えば彼の師新渡戸稲造が満州事変は兎も角、上海事変を正当防衛というのは「三百代言的」だとして批判的だった<sup>81</sup>ように、事変を当然視する態度は必ずしも一般的ではなかった<sup>82</sup>。ここに鶴見における自由主義を考える際の一つのポイントがあるものと思われる。

では、鶴見はどのような論理で事変を容認していったのであろうか。まずは事変前の鶴見の議論を振り返ることから始めてみたい。

1928 年出版の『英雄待望論』では次のような対中政策論が展開されている。後の鶴見の政策論の原型となっている議論なのでやや詳しく紹介する。まず人口問題に悩む日本にとって中国は市場・食糧及び原材料供給地として極めて重要である。かつては政治的・軍事的手段でそれらを確保していたが、最早今日では経済的手段によるべきである。そして満州は日本の生命線の一つであるが、そこへの進出は基本的に経済的なものでよく、政治的な手段は軍閥が恣意的な政治を敷いているという中国の無秩序のリスクを回避するための最小限のものでよいと考えていた。そして軍事的な進出は「無謀かつ時代遅れの思想」だとして否定していた。<sup>83</sup>

そしてその後の議論も基本的にはこれを踏襲したものとなっているが、北伐が完了し、中国が徐々に極めて強硬な革命外交を推し進めるにつれて徐々に論調が変わっていく。翌 1929 年には中国の不平等条約改正に日本は協力するべきであるとしつつも、法的根拠のない理不尽な要求には屈するべきでないとして「日本は東洋全体の警察のお役目をつとめてあげるのだ。そのことがよく日本人の間にも徹底し、支那の人にもよくわかつてくれば、それでも満州と蒙古のものを、みんなすぐ返せなどといふむりは、支那人もいはなくなるであります。」<sup>84</sup>として、満蒙権益を維持した日本

---

<sup>81</sup> 太田雄三前掲書 134 - 6 頁

<sup>82</sup> 吉野作造、横田喜三郎、石橋湛山らの厳しい事変批判については三谷太一郎前掲論文参照。

<sup>83</sup> 『英雄待望論』340 - 50 頁

<sup>84</sup> 『日本と世界』（名著普及会、1982 年）[アルス社、1929 年の復刻]102 - 3

優位の形での日中協調の可能性に望みを託している。

1930年1月に民政党の入党勧誘を断わった<sup>85</sup>鶴見は再び無所属で出馬して落選ののち、5月には渡米している。その渡米前直前に吉田茂外務次官と会見<sup>86</sup>し、「日米間、日支間の問題八つまりは満州問題に究局<ママ>す」と考える吉田から、「米国に対し日本の軍縮に対する態度<sup>が</sup>可 どう影響して居るか、を調べて頂きたい」という依頼を受けている。この会見で注目されるのは吉田が「[満州は]支那が liberal になれば返してもよし、即ち日本可 満州の天然資源に自由に access[すること]を許せば也。[しかし]今日の如き時に八多少の根拠地を満州に持たずして八日本国民を不安の地位に置く。」として自由な取引さえ出来れば満州を政治的に困り込むことは不要だと主張していることである。そして、上で見たように、鶴見はこの時点では吉田とほぼ同意見であったと思われる。また、同年7月には将来の政治方針の大綱の一つとして、「戦争に依らざる方法にて領土の拡張又八世界領土の redistribution の提唱」を行うという「新国際主義」を挙げていることから、この時点では未だ現状変更はあくまで平和的に行うべきだと考えていたことが分かる<sup>87</sup>。

それでは、なぜかれは満州事変を積極的に容認したのだろうか。

事変が進行しつつある1931年末、鶴見は満州各地を視察して周り、軍人・外交官・満鉄関係者などと会見して広く意見を聞いて回っている<sup>88</sup>。そしてその間視察した北満州への日本の進出に強い印象を受けて、「日本民族の北満進出といふ事を実感す。Anglo-Saxon が世界不毛の地に開拓者として進出したる如く、virile な日本民族が生活の必要に迫られて前進したのだ。…強い人間が勝つのだ。<sup>89</sup>」とまで言い切っている。恐らく、満蒙の現場を自らの目で見たことにより、土地をより有効に利用できる優れた民族は膨張すべきだという持論<sup>90</sup>を確認し、かつ多くの当地の日本官吏から満蒙の不可欠性について説かれた結果、生命線である満蒙を軍事的に占領することもやむを得ないと容認するに至ったものと考えられる。その結果、満州で行なうべき政策として、中国人排斥・米資排斥・内面指導の3つを自ら積極的に説いて回る有様であった<sup>91</sup>。また、他に考えられる理由としては、陸軍穏健派に分類される南・宇垣系の軍備近代化論者小磯国昭軍務局長<sup>92</sup>から、自分達陸軍幹部も最大の懸案である軍制改革を終わらせた後、昭和10年までの間に「満州問題八総決算」

85 『鶴見祐輔日記 1930年』(「鶴見文書・書類3771」)昭和5年1月1日条

86 「吉田茂次官との会見メモ」(1930年5月12日)(「鶴見文書・書類500」)

87 『鶴見祐輔日記 1930年』昭和5年7月1日条

88 『会見筆記メモ』1930～32年(「鶴見文書・書類3884」)(小磯国昭、横田喜三郎、伊東巳代治、小山完吾、奥村外事課長、大蔵公望、森島守人、駒井徳三、大橋忠一、石射猪太郎他)

89 『鶴見祐輔日記 1931年』昭和6年12月7日条

90 前掲『現代米論』3頁

91 『鶴見祐輔日記 1932年』昭和7年5月8日条の回想。

92 小磯の軍備近代化論については北岡伸一「陸軍派閥対立(1931～35)の再検討」『年報・近代日本研究』第一号(山川出版社、1979年)参照。



しようと考えていたが、「[関東軍が独断専行した]今度の事件ハ早や過ぎた<sup>93</sup>」という意見を聞いていたことが挙げられる。即ちこの情報を聞いて、陸軍内のどの勢力が権力を握っていても早晚満州事変のような事件は不可避だったと判断したように思われる。終戦後の回想で、対米戦争回避のチャンスはなかったかを批判的に検討した際にも、満州事変については「満州事変の鎮圧 不可能<sup>94</sup>」として一言のもとに片付けている所からもそれはうかがえる。

このように鶴見が世論と同様に事変を支持したのに比べ、よく知られているように、商人的外交観を持っていた清沢冽や石橋湛山等は、満州だけを独占しても世界の市場特に英米市場を失っては損だとして大局的な観点から事変を批判した<sup>95</sup>。また、鶴見とは別に大正末から新自由主義を説いていた経済学者上田貞次郎も清沢らと同様の観点からの批判を行なっている<sup>96</sup>。なお、上田は満州事変に問題意識を触発されて以来、日本の人口問題を経済的に研究することに余生を捧げたが、人口問題を重視し、太平洋会議に出席するなど鶴見とよく似た行動を取っているにも関わらず、上田が1940年の死去に至るまで満州・中国北部の政治的支配よりも対英米協調の方が大事だと考え続けることが出来た<sup>97</sup>という事実は興味深い。恐らく、経済学的な視点から大局を見ることが出来た上田と、経済が苦手<sup>98</sup>でそれが出来なかった鶴見の違いではないかと思われる。

兎も角も満蒙權益を日本の生命線と考えた鶴見はそれを米国世論に説明するために1932年1月、渡米する。基本的に中国の秩序の不安定さを強調し、日本が安定化のためにやむなく自衛上軍事力を行使せざるを得なくなったという論理で講演を行って米国の聴衆から拍手喝采を浴び<sup>99</sup>、「満州問題で八たしかに米国輿論を日本に有利に展開し得る自信つく<sup>100</sup>」と日記に記す程であった。新聞は日本に批判的だが、多くのアメリカ人の態度は「話せば解る」という程度で、日本が満州に伸びるのは当然だ位に思っていたという<sup>101</sup>。

しかし、この鶴見のアメリカ世論説得の自信を完全に粉碎してしまったのが列強の權益の集中する上海での事変勃発と民間人虐殺の報道に対する米国世論の沸騰であった。

---

<sup>93</sup> 「小磯国昭」1931年10月5日『会見筆記メモ』1930～32年

<sup>94</sup> 「講演メモ 若し日本が対英米開戦せざりしならば」1947年2月8日(「鶴見文書・書類1908」)

<sup>95</sup> 北岡伸一『清沢冽』(中公新書、1987年)91-5頁。

<sup>96</sup> 『上田貞次郎日記 大正八年 昭和十五年』(慶應通信株式会社、1963年)昭和6年11月15日条、167頁。

<sup>97</sup> 同上175、187、217、286、300、337、343頁。

<sup>98</sup> 北岡寿逸前掲書220頁。戦後の鶴見の議院秘書赤塚正一によると「先生には大変失礼であるが、経済のことがあまりお得意ではなかったと思う」という。

<sup>99</sup> 上品前掲論文「鶴見祐輔の「宣伝」活動」47頁で主張されているように、鶴見の講演は相当程度アメリカ人を魅了することに成功していたといえる。そうでなければ有料の講演旅行はすぐに打ち切りになったであろう。

<sup>100</sup> 『鶴見祐輔日記 1932年』昭和7年1月27日条。

<sup>101</sup> 『米国の支那事変観とその苦悩』(日本外交協会、1939年1月)4頁

この時点までは一貫して日米協調の可能性を信じ、「太平洋の懸橋」としてそれに貢献しようと努めてきた鶴見であったが、この時点ではじめて対米協調が当面は不可能になったという判断が出てくる。勿論、即座に日米が戦争や経済封鎖などの衝突に至ることは全く想定されていないが、しかし太平洋時代における中国をめぐる日米協調の可能性を信じ続けてきた鶴見の挫折感は甚だ深いものがあつた。2月には荒木陸相と元老西園寺の秘書原田熊雄に電報を打ち、軍縮会議で日本が誠意を見せて国際協調の意志があることを世界に示すことを提案し、これが出来なければ「此間十年間八日本八世界の除け者たらん<sup>102</sup>」と憂慮した。しかし、ますます高まる一方の米国の反日世論にさすがに楽天的な鶴見も一時は絶望してしまう。

「余は過去十年間、日本の西部太平洋政策を以て、英米日三大海軍国の cooperation にありと信じ、そのために日米了解に努力し来りたり。然るに今回の満蒙及上海の日本行動に対する米国の態度を以て全然失望したり。米国の意志が日本の支那に於ける normal growth を沮止 < ママ > せんとするにある事、今回の如く明瞭となりたる以上八日米提携ハ不可能也。日米提携の目的ハ trade, loan (米資導入), China (支那保全) の三である。〔そして今後の対米関係悪化に備えて〕loan ハ仏国<sup>103</sup>より入れ得るか否か研究すべし<sup>104</sup>。…余の今回の欧州行ハその調査の機会也。<sup>105</sup>」

若干引用が長くなったが、鶴見が如何に米国世論の悪化に衝撃を受けたかは一読して明らかであろう。鶴見はこの米国世論悪化の原因を、米国の中国市場への過大評価にあると考え、この過大評価がなくならないかぎり、当面日米提携は困難であると考えざるを得なかった<sup>106</sup>。又、フーバー政権のスティムソン國務長官の度重なる不承認声明についても、日本の満州占領は自然の勢いであり「Stimson の覚書位でとまるものでハない<sup>107</sup>」と非常な不快感を示した。

その後、事変以来の日本を弁護するために招かれたパリでの国際連盟協会では、政治委員会で見人に工作して日本非難の決議案文を変更させることに成功したほか、「領土的現状維持の原則は、同時に、移民自由と、通商自由の原則とを随伴するに非ずんば到底これを実行すること不可能である」

<sup>102</sup> 『鶴見祐輔日記 1932年』昭和7年2月5日条

<sup>103</sup> 鶴見は、英米日が脱したのにも関わらずフランスが金本位制に留まったことをその経済的実力の表れであるとしており、フランスの経済力を非常に高く評価していた。『欧米大陸遊記』（大日本雄弁会講談社、1933年）353頁

<sup>104</sup> この時期、当面の対英米協調の困難さから、一時ソ連やフランスとの協調が模索された。南次郎陸相のフランス資本導入計画への関与については、北岡伸一前掲論文「陸軍派閥対立（1931～35）の再検討」72 - 4 頁参照。

<sup>105</sup> 『鶴見祐輔日記 1932年』昭和7年5月8日条

<sup>106</sup> 同上昭和7年6月23日条

<sup>107</sup> 同上昭和7年9月3日条

と説いて開場の拍手をあげた<sup>108</sup>。

しかし、欧米を旅行していくうちに、鶴見は日本が国際的孤立への途を歩みつつあるということ  
を否応なしに感じざるを得なかった。そのきっかけとなったのは欧州で一時進むかに見えた国際協  
調の動きである。折からローザンヌ会議で独の賠償の削減が決定されたのを聞いた鶴見は、「欧州  
可 小異を捨てて大同につき英仏独協調の途を歩まんとする」ものだとしてこれを高く評価し、「日  
本可 今日国際的孤立の途を歩みつつあるに際し、新しき国際協調の外交方針原則を日本の為  
に樹立する」ことをもって自らの使命であるとの決心を固めた<sup>109</sup>。国際協調への復活に自らの政治生命  
を再び賭す決心をしたと言える。

32年の後半は欧州からソ連を旅行し、再び欧州入りの後、米国を回り、1933年一月に帰国して  
いる。この間、第三節に述べる理由で以前から注目していた英国のモーズリー、ナチスのゲッペ  
ルスと会見した他、マクドナルド英国首相、カラハンソ連外相代理などの枢要な政治家とも会っ  
ている。特に外交に関して重要なのは第一にカラハン外相代理から日露不可侵条約について尋ねられた  
他、満州国承認の可能性を示唆されたこと、第二にマクドナルド首相に対して満州事変についての  
日本の事情を説明し、国際連盟での正面衝突を避けたい旨伝えたこと、第三にペーカー米元国防長  
官から日米戦は軍事的に不可能だという情報を聞いたことである<sup>110</sup>。

また、国際連盟に関しては、極東の情勢についての情報不足から中国の宣伝にのせられがちだと  
感じていた為、その満州問題の取り扱い方には非常な不満をもっていた<sup>111</sup>。しかし、日本も国際協  
調への復帰を目指すべきだと考え始めていた折でもあり、連盟からの脱退は出来れば避けたいと考  
えていた。したがって、斎藤実内閣の内田康哉外相の拙劣な外交<sup>112</sup>により、日本が連盟の和協委員  
会への米ソの招請に強硬に反対したことを聞いた際には「愈々日本の連盟脱退乎。憚然たり<sup>113</sup>」と  
落胆した。

そして1933年1月3日、一年ぶりに帰国した鶴見は日本の国際協調への復帰をいかに実現して  
いくべきなのかの方策を探ることとなる。しかし、議員にもなれず<sup>114</sup>、官僚機構に手足もなく、有  
力な政治家の後ろだてもなしに実際の外交政策に影響を与えることは甚だ困難であった。

---

<sup>108</sup> 『欧米大陸遊記』338 - 42 頁。

<sup>109</sup> 『鶴見祐輔日記 1932年』昭和7年7月13・14日条

<sup>110</sup> 同上8月11日、10月16日条

<sup>111</sup> 『欧米大陸遊記』343 - 4 頁

<sup>112</sup> 内田外相は日中二国間での問題解決を考え、蒋介石政権の対日宥和性に期待をしていたという  
酒井哲哉『大正デモクラシー体制の崩壊』（東大出版会、1992年）28 - 36 頁

<sup>113</sup> 『鶴見祐輔日記 1932年』昭和7年12月19日条

<sup>114</sup> 同上昭和7年7月22日条では民政党に入って外交を担当するのが自分の唯一の道だとしてい  
るが、資金繰りの問題がネックとなったのか結局入党するのは36年のことである。基本的に33  
~ 35年は後藤新平その他の伝記編纂に主な労力を注いでいる。

## 第二節 国際的孤立緩和のための模索

国際協調回復を目指して鶴見が帰国した 1933 年の春頃、日本では日米協調を望む雰囲気が出まわっていた。それは塘沽停戦協定による満州事変の収束、国際連盟脱退による連盟との摩擦の減少及び、アメリカでのルーズベルト政権の成立によるスティムソン長官の退任やフィリピン独立の方針決定などの諸理由により、1933 年春頃から日本の論壇で親米的風潮が台頭していたためである。ちょうどこの頃行われた東洋経済新報誌主催の座談会<sup>115</sup>において、鶴見は現在の日本の日米親善熱は一人よがりであり、アメリカ側にも親日的な世論を作るためには日本側も譲歩することが必要だと主張している。

この時期に二国間協調により国際協調への復帰を図るとするのは多くの論者の考えたことであり、特に珍しいことではない<sup>116</sup>が、鶴見の対米関係論には幾つかユニークだと思われる点があった。以下、33 年 6 月頃の彼の対外政策論をみていく<sup>117</sup>。

まず鶴見によると世界の現状はアメリカ・ソ連・西欧・西部太平洋の 4 つのブロックに分かれつつあるが、これは必ずしも必然的なものではないし、望ましいものでもない。次に、日本は人口増加圧力と国内資源の不足のために人口問題を抱えているが、このままでは生活程度を低下させるか資源への通路打開のどちらかを迫られて後者を選ぶことになるだろう。従って欧米識者の中でも現実的な人物は「日本の勃興の到底沮止<ママ>し得べからざることを予見し、正当なる日本の要求はこれを容れて日米間の利害の調節を行ふの賢明なることを認めてゐる。」たとえば、「西洋各国は西部太平洋に有する自国殖民地にして少しも自ら使用し居らざる熱帯地を日本に譲渡するを賢明なりとすとし、その好適地としてニューギニアを挙げてゐる<sup>118</sup>」人物もいる。そしてまさに、西部太平洋での日本の優越を認めさせることと日米協調の両立こそが鶴見の長年の講演活動の眼目であった。

次に、鶴見によるとアメリカの日本批判の要因は、「中国びいきの感情論」、「純理的条約尊重論」および「日本が中国に進出すると門戸閉鎖をしかねない」という危惧の三点であった。鶴見は「  
については、日本は門戸解放を考えているので問題はないとし、  
はそれほど重要でないとした上で、  
は「個々の事件が条約正文の何条に違反するといふ法律論よりも、その一切の行動の基礎

---

<sup>115</sup> 蠟山政道・長谷川如是閑・芦田均・清沢冽・田川大吉郎・上田貞次郎・鶴見祐輔他「日米親善問題座談会」『東洋経済新報』昭和 8 年 6 月 24 日号

<sup>116</sup> 北岡伸一前掲書 113 頁

<sup>117</sup> 「連盟脱退と日米協調」1933 年 6 月以降（「鶴見祐輔・文書 343」）原稿用紙 50 枚近い纏まった分量の政策メモ。

<sup>118</sup> 具体的にはマイアミ大のトムソン博士の 1930 年の『世界人口に於ける危険地帯』という著作。

となる政治思想に反対したのである」と解釈する。即ち、鶴見によると日本が軍国主義化しつつあるのではないかという米国側の懸念こそが日米間の最大の問題であるが、これも日本の内政が安定すれば払拭されるので、問題はないであろうという。さらに、万が一の理由で日米関係が悪化しても、所詮アメリカに出来るのはスティムソンの声明位のものでそれ以上に経済制裁や軍事的圧力をかけてくることはないと思われるので、にらみ合いの膠着状態になるだけである。

では、この国際的緊張状態をどのようにすれば緩和できるのか。一つは国際社会から離脱して完全に孤立するという選択肢もあるが、五箇条の誓文の開国進取の精神に反するため、日本国民はこれを選ばないであろう。従って、争点ごとに国際連盟と協調し、また米国との関係を調整していくべきである。その為には、まず米国側は「西部太平洋に於ける現勢の承認」によって東洋の平和を維持し、日本の生存条件を認めることが必要であり、日本側は自国の政体ガリベラルであることを示して「日本の政治に対する安心」を欧米に与えることが必要であると考えられていた。このようにして当面の緊張を緩和した上で、太平洋上の平和機関問題 中国の門戸開放についての日米諒解 共産主義の中国内地伝播への日米共同対処 排日移民法改正という長年の両国間の懸案の解決を行なえばよい、としている。

以上の議論に特徴的なのは、第一に日本の国内政治に対するアメリカの危惧という要因を極めて大きく取り上げており、逆に言えばこれさえ解決できれば殆んど日本側には問題はないと考えている点<sup>119</sup>であり、第二に、そのような判断が出てくる前提として、アメリカ側の条約や道義を重視する道徳的・法律家的な外交観<sup>120</sup>をかなり軽視し、実利的な部分で妥協できれば折り合えんとする判断である。以上二点の議論は日米開戦頃までの鶴見の対米政策論の一貫した骨子となっている。これらの背景には、満州事変前後の米国での講演で得た好感触の記憶が強く影響していたと見られる。つまり、事情がよく分かっていないから反対しているが、よく説明すればアメリカは日本の多少の膨張は分かってくれる筈だろうというわけである。

なお、鶴見は国際協調の再建を祈念していたものの、それはかつてのワシントン体制への復帰を目指すということとは全く違う意味であった。端的に述べるならば、彼は当時隆盛していた「持てる国」「持たざる国」についての議論をそのまま受け入れていた。つまり、日本のように領土狭小で人口過多であるにも関わらず、世界の高関税政策と移民禁止によって非常な不正義の犠牲となっている国にとっては、英国のように広大な領土を確保したうえで現状維持を唱える国々の「『不正義』を破つてからでなくしては真実の平和は来ない<sup>121</sup>」という。このことを彼は独特の言い回しで「大

---

<sup>119</sup> 鶴見はかつて、民主主義は平和的だという議論は過去の歴史的事実に反するものであると考えていた。『米国民性と日米関係の将来』150 - 5 頁

<sup>120</sup> ジョージ・ケナン著・有賀貞他訳『アメリカ外交 50 年』（岩波現代文庫、2001 年）

<sup>121</sup> 「国際平和と国民正義」『東洋経済新報』昭和 8 年 6 月 10 日

日本主義を提唱し、北守南進し、太平洋時代の Rome 帝国、大西洋時代の英帝国の途へ日本を lead する...[の]可 余の使命ならん<sup>122</sup>」と表現している。即ち、日本にとってより有利に現状を変更した上での国際協調実現を目標にしたといえる。

これは確かに一定の説得力のある議論ではあるが、しかし、容易に想像されるように、観念的には兎も角、実行に移すのには大いに問題のある議論であった。例えば、近衛文麿などの「持たざる国」論について検討した清沢冽は様々な実際上の問題点を指摘した後で、このような遠大ではあるが実行困難な問題の解決の前提としてもまず「兎に角国際連盟に復帰することを必要とする<sup>123</sup>」と主張した。しかし、鶴見の場合は連盟への復帰を積極的に主張していた様子も見られないし、どのようにして国際的な再分配を行うのかの具体案を持ってはいなかったように思われる。あえて挙げるのであれば、その具体策の前提となる日本がいかにか「持たざる国」であるのかという認識を太平洋会議という国際非政府組織の場で議論して国際的に広めていこうと考えていたと言えるかも知れない。

33年3月に連盟を脱退した日本にとって、法的にはあくまで民間人の会合とされてはいたものの、議員や閣僚経験者をも含む面々を集めた太平洋会議は実質的には「日本の参加する唯一の国際政治会議<sup>124</sup>」であり、日本の識者の考えを表明する場としてそれなりの重要性を持つに至っていた。

1933年の8月にカナダのバンフで行なわれた第五回太平洋会議の準備会合において、鶴見は他の日本側参加者に領土分配の不公平なままの現状維持では問題の根本的解決にならないことを他国に伝えようと主張し、同意を得ていた<sup>125</sup>。しかし、この趣旨に基づいて横田喜三郎・高木八尺らが準備した日米ソを中心とする太平洋の平和機構創設の提案は、国際連盟を弱めるような動きを加速するべきでないとの各国委員からの反対に会い、議論は深まらなかった<sup>126</sup>。この事に鶴見は非常な不満を抱いた。

「資本主義自身の検討迄突つ込まざりし為め太平洋問題の根底に触れざりし感あり。要八英米可 資本主義制度を維持し且つこの領土と民族との現状を維持せんとするの本体を鋭く批判するに非ずんば問題の核心に触るを得ず。而して満州問題の如きその派生的一現象に過ぎざるを以てなり。<sup>127</sup>」

---

122 『鶴見祐輔日記 1933年』昭和8年7月3日条

123 清沢冽『時代・生活・思想』（千倉書房、1936年）290頁

124 「ヨセミテ会議の価値」『太平洋問題 第六回太平洋会議報告』（日本国際協会、1937年）

125 『鶴見祐輔日記 1933年』昭和8年7月25日条

126 片桐前掲書 258 - 61 頁

127 同上昭和8年8月29日条

「持てる国、英米の偽善と無思慮こそが問題の根本であり、満州事変はその矛盾の表れに過ぎない、  
というこの認識はしかし、必ずしも武力による現状変更を肯定するものではなかった。例えば、彼  
は依然としてロンドン軍縮条約を高く評価<sup>128</sup>していたし、また若槻礼次郎民政党総裁が「砲車を牽  
く骸骨<sup>129</sup>」という言葉で過度の軍拡を批判した演説に「今日の日本の自由主義的気分代表言論也<sup>130</sup>」  
と共感している。また、既に連盟自体には失望していたが、ドイツの連盟脱退を聞いて世界が再び  
大戦争へと邁進しつつあるのではないかと危惧した<sup>131</sup>。

このような思考の背景にある状況認識<sup>132</sup>は以下のようなものであった。第一に、日本国内の経済  
機構改革は世界各国の国際的分業を念頭において進めるべきであり、一国の事情のみで計画をたて  
ると世界戦争をひきおこす可能性があつて非常に危険である。第二に、世界は西部太平洋・米大陸・  
西欧とアフリカ・ロシアと中央アジアの4つのブロックにわかれつつある。第三に以上を踏まえた  
うえで人口・市場・国防の観点から「日本の最低限度の要求」を確立するべきである。つまり、ブ  
ロック化の趨勢の中であくまでも世界戦争に巻き込まれないようにしながらも、人口問題の圧力に  
苦しむ日本の生存圏を確保することが重要と考えていたといえる。再び彼の海洋文明史観があらわ  
れた独特の表現を引いてみよう。

「今や日本民族の膨張すべき時代也。この機運を善導すること [判読不能。為政か?]家の  
任務也。日本膨張の方向を北ならしむる勿れ。露国と闘ふハ Napoleon の破れ Kaiser の破れし  
途也。南こそ八日本の行くべき方向ぞ。日本八大陸国民たるべからず。海国たれ。太平洋八日  
本民族の海也。海を征するもの八常に興り、海を失ふもの八亡ぶ。 <sup>133</sup>」

より具体的な情勢認識としては1934年の時点では、太平洋をめぐる列強中でのイギリスの優位  
が崩れた後、日露戦争で日本が上昇し、一次大戦で独仏が衰えたために、残された海軍強国である  
「日本と米国との勢力均衡を如何にすべきかといふ問題が未解決のまま取残された<sup>134</sup>」と考えてい  
た。そして貿易関係の緊密さや日米が共に東洋の平和を望んでいることを根拠に「幸にして日米の  
間に於ては利害の相反するものが殆んどない」のであり、誤解をなくしていけば日米は協調出来る

128 同上昭和8年10月15日条

129 若槻礼次郎『明治・大正・昭和政界秘史 古風庵回顧録』(講談社学術文庫、1983年)345  
- 51頁

130 『鶴見祐輔日記 1933年』昭和8年10月29日条

131 同上昭和8年10月15日条

132 「日本国策研究の指導原理」(1934年10月4日)「鶴見文書・書類344」

133 『鶴見祐輔日記 1933年』昭和8年9月10日条

134 「太平洋上の勢力均衡」『政治経済時論』昭和9年4月号

筈だと考えていた。

これが翌 1935 年に入るとさらに、ちょうど満州事変の頃から日本が集中豪雨的な輸出の拡大に成功し列国の中できわめてすばやく恐慌からの回復を実現したことに自信を深め、世界恐慌以来長期低落傾向で満州事変にも手出し出来なかったアメリカも衰退へ向かっているという判断が加わった。その結果、国内では社会政策で人口問題に対処しつつ、英米露の衰退に乗じて国外では日本製品の販路拡大に積極的に努力すべきだということに変わってくる<sup>135</sup>。

以上要するに、1930 年代前半には日本が満州国の育成を図り、経済的に膨張しつつ、しかもそれを英米と協調しながらおこなうこと、そして可能ならば太平洋の主要国による平和機関で現状の平和的変更を行なってワシントン体制の改訂版を作ることを鶴見は望んでいた。これはこれだけで見ればそれなりに合理的な議論であったかもしれないが、しかし同時に重大な問題点も孕んでいた。それは、勢力圏を満州にとどめるといった内在的な論理が全くなく、しかもアメリカは誤解しているだけで本当は日本を東洋の安定勢力と理解してくれる筈だと希望の観測が根底にあるために、いったん華北分離工作などが行なわれ満州の外に日本軍の行動が拡大した場合、これを批判する論拠に乏しく結果的に軍事的膨張を追認する結果となったのである。この点は、同じように対英米協調を重視した宇垣が「北支支け見えて世界が見へぬ連中は困り者也」として国際社会との折り合いの観点から華北分離工作に否定的であり、陸軍の蒋介石排斥方針は感情論だとしてより現実的な見方をしていた<sup>136</sup>のと比べると大きな違いがある。やや厳しい言い方をすれば、鶴見は日本の膨張と英米との提携の 2 つの目標の間の厳しい緊張関係を十分に詰めて考え抜いていなかったと言えるかもしれない。

一方、この間、イタリアのエチオピア侵攻によって国際連盟が問題解決能力を失っていることを痛感し、かつて相当に高かった鶴見の中での連盟への評価も大きく低下した。そして、ヴェルサイユ条約及び連盟が無効化しつつあるのは「現存世界の経済組織と政治組織自身を改革せずして、ただ一片の国際連盟條章によつて、恒久平和を実現せんとしたることに内在する矛盾の暴露<sup>137</sup>」であり「League は歩一歩死に近づく<sup>138</sup>」ものと捉えられた。

普遍的国際組織が凋落し、ブロック化が進む状況を鶴見はやむを得ない趨勢と見ながらも、同時に、全体主義の独伊対民主主義の英米という図式の中で日本が前者の陣営に属すると認識されるのを非常に恐れていた。それは対米関係を損なう恐れがたつと、世界戦争に巻き込まれる恐れがあると懸念したためである。そのような事態をさけるためにも、鶴見は躍進著しいソ連に対して日英米

---

<sup>135</sup> 「太平洋上に於ける英米露と日本」『雄弁』昭和 10 年 8 月

<sup>136</sup> 酒井前掲書 130 頁

<sup>137</sup> 『風雲の坩堝エチオピア!』[駒井重次との共著] (ヤシマ書房、1935 年) 7 - 8 頁

<sup>138</sup> 『鶴見祐輔日記 1935 年』(「鶴見文書・書類 3776」) 昭和 10 年 12 月 19 日条



が提携してあたるべきだと考えた。例えば 1936 年 2 月に“新太平洋政策を論ず”と題した講演では「1、西部太平洋を日本に委すこと2、日英米の提携3、この三国の力を以て露国に対し、以て支那問題の解決<sup>139</sup>」の3つを説いている。当時の日本外交の共同防共という理念による国際協調の発想に近い。「日本八極東にて何を為しても米国に戦意なしとす。余も同意見也<sup>140</sup>」とアジアで日本が行動している分にはアメリカは干渉してこないだろうと読んでいた鶴見にとって、唯一の対米戦の危険は欧州戦への巻き込まれであった。そこで彼は将来の欧州大戦に巻き込まれることで日米が衝突することを、何にもまして避けねばならないと考えるようになった<sup>141</sup>。

1936 年 8 月にヨセミテで開かれた第六回太平洋会議において日本側はもはや太平洋の平和機構の問題を論じることには消極的であったが、それは国際連盟とリンクした形での平和機構は英米有利の現状維持の道具となる可能性が高いと判断したためであった。また日本太平洋問題調査会日本支部が日本国際協会と合併したこともあり、全般的に政府の意向を代弁しただけで建設的な議論をかわすことは出来なかったという<sup>142</sup>。なお、鶴見は会議前の講演で、日本の膨張は政治的でなく、経済的に過ぎず、しかも「日本人の理想ハ cultural expansion 也とて東洋文明を高調<sup>143</sup>」している。観衆は感銘を受けたようだとしているものの、聴衆がこの散文的な論理にどれだけ論理的に納得したのかは相当に疑問である。

この後、鶴見は欧州各国を回り、国際文化振興会のすすめる尾上菊五郎の欧州巡業実現のために奔走したが、これは表向きの用件であり、主な仕事は外務省に協力して「世界列強の日本に対する態度を多少なりとも変化せしめる[ために]...米国並に英国の中心人物の意向を打診<sup>144</sup>」することであった。

そこで得られた結論、特にイギリスの政治家の意見は日本との妥協を望む声が高く、国際協調再建を考える鶴見を力づけるものであった。例えばリットン卿は満州国を完全な永世中立国とする代わりに承認する案を語ったほか、日中間の関係調整のために日英中米ソの新条約を作ることを提案した。またマクドナルド自治大臣は、イギリスは連盟主義であるので、連盟の下にロカルノ条約のように各地域ごとの地域的な協定を作る考えであり、アジアについては日英中米ソで諸懸案の解決に当たればよいと主張した。バンシッター外務次官はさらに率直に、日本が満州国承認を各国に大仰に要求し続けるのをやめてしばらく大人しくしていれば国際社会は満州問題を忘却してしまう

---

139 『鶴見祐輔日記 1936 年』昭和 11 年 2 月 3 日条

140 『鶴見祐輔日記 1935 年』昭和 10 年 12 月 17 日条

141 『鶴見祐輔日記 1936 年』昭和 11 年 10 月 31 日条

142 片桐前掲書 306 - 7 頁

143 『鶴見祐輔日記 1936 年』昭和 11 年 8 月 7 日条

144 昭和 11 年 7 月 26 日付宇垣一成宛鶴見祐輔書簡『宇垣一成関係文書』(芙蓉書房、1995 年)295 頁

のに、という忠告を与えている<sup>145</sup>。このようなイギリスの対日宥和性は欧州の国際関係悪化に伴ってドイツへの備えを極東より重視したためであることが既に知られている<sup>146</sup>が、このイギリスの考えは鶴見のワシントン体制を改訂する事による平和的現状変更の実現可能性への期待を強めた。

そして、次章第一節で述べるように、鶴見は陸軍穏健派の宇垣一成<sup>147</sup>が率いる内閣が成立し、日本を国際的に膨張させつつ、しかも同時に英米との関係にある程度改善することを強く期待した。

### 第三節 自由主義の揺らぎとその後

以上見てきたように、鶴見の自由主義的な政策体系は 1930 年代において対外関係の面では大きく変化した。それでは、国内政治や思想の側面についてはどうだったのだろうか。鶴見についての先行研究においてこの点は殆んど言及されていないが、既述のように鶴見は自由主義を内政や思想のみならず外交をも含めた概念として考えていたため、鶴見の対外関係における議論の変遷を考える際にもこの視点は重要だと思われる。

結論を先回りして述べると、たしかに国内政治や思想の側面においても鶴見の自由主義が大きく揺らいだというのは事実であるが、しかし、彼が全て自由主義を放棄してしまったのかというところではなく、幾つかの重要な点で自由主義の要素を残している。その為に彼はナチやファッショの運動に共鳴してはいるものの、最後まで実質的な議会政治重視を持論とし続けることができた。

多くの同時代の日本人と同様、鶴見の中でも、アメリカに発する世界恐慌を契機として資本主義に対する信頼は揺らぎ始めた<sup>148</sup>。特に 1929 年～32 年にかけて恐慌が深化していく過程の時期の大半をアメリカで過ごしていたために鶴見の受けた衝撃は大きかった。

まず、三度目の落選の後、暫く弟の裁判のほとぼりを醒まし、かつ文筆で資産を作るために訪れたアメリカで、ナチスの勝利は既成政党への反感を抱く若者の支持を集めることに成功したからだという新聞の社説を読んで感心し、「余は Fascist の如き明瞭なる program 無かりし為め青年の enthusiasm を充分に fill する事を得ざりし也。余の今回の外遊中に深思し研究して発見すべきもの八日本の青年を感奮興奮せしむべき program にあらずや<sup>149</sup>」として、20 年代以来の自分の新自由

---

<sup>145</sup> 『鶴見祐輔日記 1936 年』昭和 11 年 10 月 12・13・29 日条。その他、リース・ロスと 10 月 27 日に会見している。「Sir Frederick Leith Ross との会見」1936 年 10 月 29 日「鶴見文書・書類 506」

<sup>146</sup> 益田実「極東におけるイギリスの宥和外交 対日関係をめぐる議論と対応 (1)(2)」『法学論叢』130 巻 1 号・4 号、1991 年・1992 年

<sup>147</sup> 昭和 8 年 6 月 7 日付け宇垣一成宛鶴見祐輔書簡で鶴見は、宇垣が将来政権を取るときの準備のために、海外の有力者が集まる太平洋会議で宇垣の政策ラインについて紹介したいので、出かける前に政策の大綱を聞かせてほしいと頼んでいる。『宇垣一成関係文書』293 頁

<sup>148</sup> 北岡伸一前掲書 86 - 9 頁。

<sup>149</sup> 『鶴見祐輔日記 1930 年』昭和 5 年 9 月 28 日条。

主義運動の失敗の原因を明確なプログラムの欠如に求め、それを探すことを決心している点が注目される。ここだけを見ると、ファシストの模倣を考え始めたかのように思われるかもしれないが、しかしそうではない。彼が注目したのは何よりも、独伊での大衆運動が大衆、特に若い層を動員することに成功したという側面であった<sup>150</sup>。20年代の自らの新自由主義運動を、大衆運動にのって政権入りを成し遂げようとし、一応の成功を収めつつも道半ばで政治的暗殺にあって挫折させられたと考えていたため、余計に成功した独伊の運動に注目したと思われる。

資本主義についての議論を見てみる。彼は恐慌を一時的な現象ではなく、「米国社会組織に内在する欠陥の暴露だ」とみていた。具体的には、その矛盾とは20年代の米国の資本主義の繁栄が「農民と小商人と勤め人との犠牲に於て大資本と工業労働者と可繁栄した」という点であった。加えてソ連型の計画経済においても五ヶ年計画はうまくいっておらず、矛盾を露呈している。そこでナチやファッションイギリスのモーズリーのような「修正資本主義の運動」が世界的に起こって来ており、さらに修正資本主義実行は代議政治では出来ないために「議院政治の修正」も世界的な現象となっている。そして「これ可日本に起きる時可自分の政治的に決起する秋だ」と認識していた。つまり、鶴見はかつて自らが世界的な潮流であると考えた資本主義・議会政治を修正する運動が今度は新しい世界的な潮流なのではないかと考え始め、それに政治生命をかけるかどうかを考え始めていたと言える<sup>151</sup>。

次に、議会政治について。英国の政治的危機を説いた本に感銘を受けた鶴見は、英国の経済的優位が崩れた今日ではもはや英国流の19世紀的議会政治及びそれが依拠しているリベラリズムの全盛期は過ぎ去ったのではないかと考えた。そして1920年代に自らが信奉していた英国的な自由主義にかわる新しい指針を探し始めた。そこで漠然とではあるが目標とされたのは、上述のように英独伊の現状打破的な運動であった<sup>152</sup>。

ここで重要なことは、以上のような資本主義・議会政治を修正する運動が単に欧米諸国に独自の現象としてではなく、日本でも将来起こるであろうことの実取りとして理解されている点である。即ち、1931年6月の政治的将来予測において彼は、翌年に若槻内閣が倒れて政友会内閣が成立し、34年頃に不人気で倒れ、その後大混乱が起こり、その時が自らの再起の時であると考えていた<sup>153</sup>。

そして、「近来余は individualism に基く liberalism に疑を生じ居る所〔であり、〕…今後の日本の行く途は individualism にあらず、新しき collectivism 也。従来の新自由主義の途ハ一大廻転を要す<sup>154</sup>」として本格的に新自由主義からの転進を考え始めつつあった。しかし、この時点ではまだ

---

<sup>150</sup> 『鶴見祐輔日記 1931年』（「鶴見文書・書類3772」）昭和6年4月5日条。

<sup>151</sup> 同上昭和6年2月23日条。前掲『現代米国論』196、218頁も参照。

<sup>152</sup> 同上昭和6年8月10日条。

<sup>153</sup> 同上昭和6年6月9日条。

<sup>154</sup> 同上昭和6年8月13日条。

採用されるべき新指針の内容がそれほどつめられていたわけではない。換言すれば、ちょうど自由主義の妥当性への漠然とした不安を感じつつあったところ、それに変わりうるものとして欧州に勃興しつつある動きに目を奪われたということだと思われる。

以上見てきたように世界恐慌の勃発によって 20 年代以来の経済・思想面での自由主義への確信が大きく揺らぎ始めていた鶴見にとって、対外関係における満州事変の勃発及びその結果としての国際社会からの孤立はこの懐疑を深めるものであった。本当に自由主義的な政策体系をとることが日本のためになるのだろうか、との疑問をかかえながら 30 年代初めの欧米を巡る中で、かつての自由主義の必然性への確信は揺らぎ始めていた。前述の通り上海事変に対する米国世論の極めて厳しい批判を現地で浴びた鶴見は大きな衝撃を受け、その傾向を強めた。そして一時は、米国の商人文明と日本の武士文明は根本的に相容れないのではないかと、根源的な対話の不可能性を考えるまでに追い詰められ、また「日本にて余の従来行い来りし自由主義運動ハ日本文化と日本国民性の根本に反する故、困難のみ多くして実績挙らざりし。今後の日本の方向と世界の大勢よりして、liberalism 運動を転向すべき時期ハ次第に近づきつつある乎<sup>155</sup>」と自由主義への確信を全面的に放棄することすら考慮するに至った。

満州事変をめぐる対立により、自由主義的政策の全ての前提であった対英米協調外交の可能性はもはや薄れたかに見え、また 20 年代に無限の成長を続けるかに見えたアメリカが挫折したことで経済体制としても自由主義経済はもはや時代遅れであるのかもしれない。これらの影響は、彼が思想の上で目標とすべき人物の喪失というかたちで如実に表れた。

「学生時代ハ新渡戸先生を卒業後ハ Wilson をそれより Wells を次に John Morley を眺めて余は四十二の頃まで歩み来りし。…今日ハ如何。余の胸中にハかかる目標消えたり。…今後の目標ハ[ウィルソンやモーレーのような感傷的な人ではなく、ビスマルクやリンカーンのような]従来より強き人々也。…今後の日本ハ大動乱。鉄と火の時代也。<sup>156</sup>」

しかし、リンドバーグの子どもの誘拐事件などをきっかけにしてアメリカの上海事変批判が立ち消えになったことなどにより、33 年以降再び鶴見が対英米協調の可能性を考え始めるにつれて、彼の中での自由主義は再び力を得ていく。

例えば、先に見たところからも分かるように、鶴見の議会政治についての批判の特徴は、議会政治が世界的に凋落しつつある理由が、十分機能していない資本主義に修正を加えるためには現存の議会政治では不十分であるためとされている点である。このことは裏を返せば、資本主義の弊害の

<sup>155</sup> 『鶴見祐輔日記 1932 年』昭和 7 年 3 月 27 日条。

<sup>156</sup> 同上昭和 7 年 10 月 22 日条。

修正が議会政治をある程度改革することで可能であるならば議会政治にも十分存在意義があるという主張にもつながった<sup>157</sup>。

また、鶴見の議会政治改革に関するアイデアを見ていくと、彼の議会政治への視線がどのようなものであったのかがよく分かる。それは、第一に、彼が議会政治の自由主義的な側面、即ち国民によって選ばれた代表者が弁論を闘わせてよりすぐれた政策を作り上げていくという点については極めて頑固にこれを維持することを一貫して主張しているという点であり、第二にその反面、議会政治の民主主義的な側面、即ち一人一人が同じ価値を持ち平等の投票権をもつという点は多数者の専制を生むとして非常に問題を感じており、これをどうやって是正するのかを考えていたという点である。

例えば彼は等級選挙の導入によって有識者・有徳者の一人あたりの票数を増やす事で政治演説がより高度化するとともに、国民もより多数の票を得る名誉のために努力するので向上しようと努力する筈だと述べている<sup>158</sup>。また、30年代はじめの欧米を旅行した結果として、欧州では民主主義が精神的な個人の価値の差を認めない悪平等に陥ってしまい、国民全体の退嬰化が進んでしまったと観察している<sup>159</sup>。

このように既存の議会政治には改革が必要だと常に思っていたことは事実ではあるものの、鶴見は議会政治それ自体を排して軍部などが独裁政治を行う事には一貫して反対した。

従って、例えば岡田啓介内閣の成立を「party corruption を矯正し Fascio の危険を避くる意にて元老西園寺公の recommendation 八流石に感服<sup>160</sup>」として極めて肯定的に評価しているし、1936年10月のイギリスでの講演では「[日本に]Fascio の来らざりし理由」として、好景気・軍の不統一・首相奏薦者である元老西園寺の智慧・右翼に思想が無いことの4つを挙げたうえで「故に次第に立憲政治に返らん<sup>161</sup>」と結論づけている。

もともと1920年代に政治を志した際には、「新自由主義」政党を作ることで既成政党の腐敗をただすことを目標としていた鶴見であるが、30年代に入ると寧ろ、いかに議会政治を軍部の力から守るべきかということをしきりと考えざるを得なくなっていた。特に鶴見に大きな影響を与えたのは、永田鉄山軍務局長斬殺事件及び2・26事件という二つの事件であり、それらは全体としては影響力を高めていた陸軍部内での軍閥抗争の産物であった。鶴見は前者については、このままでは「軍人八日本を救ふべからざる大戦に誘導すべし。危い哉。」として、これ以上軍の政治への影響力が高

---

157 「出現せんとする新議会制度」『政治経済時論』1935年4月

158 『鶴見祐輔日記 1932年』昭和7年8月1・4日条

159 『欧米大陸遊記』776 - 88頁

160 『鶴見祐輔日記 1934年』昭和9年7月4日条

161 『鶴見祐輔日記 1936年』昭和11年10月1日条

まると列国との関係に重大な影響を及ぼしかねない事を懸念した<sup>162</sup>。また、後者については反乱自体には否定的であり軍紀粛清が必要だとする一方で、そもそも軍人が政治に関心を抱いた原因となった社会政策特に農村救済を考える必要性を痛感し、「肅軍と社会改革との為め努力すること、余の刻下の急務也」と考えるようになった<sup>163</sup>。そして続く広田内閣への吉田茂の外相入閣を軍が自由主義的すぎるという理由で拒否したことを聞いて益々軍への反発を強め、「要ハSparta主義とAthens主義の闘ひ也。その大衝突ハやがて来るべし。この時これを正面より受けて闘ふべきものハ政党也。<sup>164</sup>」として軍の抑制に政党の使命を見出して、闘志をかきたてていた。尤も彼が政党と軍を対立的に考えていたのは1937年の第一次近衛内閣成立以前までであり、それ以降は劇的に政策論の優先順位を変えたことは次章第二節で述べる通りである。しかし、彼は従来から議会での弁論には非常に力を入れていた。例えば、昭和12年1月の議会質問が腹切り問答で流れてしまった際には、「昨年夏以来、態々世界を旅して蒐集したる材料と半年思索の [判読不能]に成りし余の外交演説」が浜田国松の瑣末な質問のお蔭で駄目になってしまったと憤慨している<sup>165</sup>ことから、いかに議会での弁論を重視してそのために周到な準備を重ねていたかが分かる。

次により思想的な側面について検討してみたい。この点、鶴見は依然として自由の価値に大きな信頼を置いていた。彼によれば、そもそも欧州で近代国家が起こった原因は、社会内の個人に対して秩序とともに自由を確保したことで個人個人が十分に力を発揮できる社会を作ること成功したからであると考えられていた。

「自由なき社会に於ては、個人の奔放自在なる発達なく、個人の発達なき社会に於ては民族の発達はない。この点に於て欧州大陸が過去四五百年年間に急速の進歩をなしたのは、実に社会的秩序と個人自由の保障の結果であつた。<sup>166</sup>」

この逆に、独裁政治は個人の人格を大事にしない遅れた政治体制であり、特に「イタリーのごときファッショ政権の特色は、その強烈なる排他的国家主義にある。偏狭なる自国至上主義にある。

---

<sup>162</sup> 永田局長が陸軍全体をある程度統制したうえで外務省とのほぼ唯一のパイプとなって広田外交に協力していたため、この事件の後には陸軍部内の遠心化傾向が強まり、むしろ政策形成の主導力を失ったという指摘については井上寿一『危機のなかの協調外交』（山川出版社、1994年）208 - 10 頁参照。

<sup>163</sup> 『鶴見祐輔日記 1935年』昭和10年8月13日条、『鶴見祐輔日記 1936年』昭和11年3月3日条。

<sup>164</sup> 同上昭和11年3月14日条

<sup>165</sup> 『鶴見祐輔日記 1936年』昭和11年1月22日条

<sup>166</sup> 『風雲の坩堝エチオピア！』[駒井重次との共著]（ヤシマ書房、1935年）44 - 7 頁

…ゆえにファッショ政権が究局<ママ>は戦争に到達すべきことは世界の識者の予見したところであつて、」タイミングの問題に過ぎなかった<sup>167</sup>、として政治体制としてのファッショは戦争を招来する危険が高いとしてこれを斥けている。

では、彼のヒットラーやムッソリーニ、モーズリ - へのかなり高い評価はどのように説明すればよいのだろうか。この点、既に述べたように彼は雄弁を駆使して大衆運動にのって既成の政党や官僚組織の外側から（しかし議会政治の枠内で）権力に迫ることを理想としていたが、まさにこれらの現状打破運動はこの鶴見の理想を実現した運動の形態であると考えられた。このことは、例えばルーズベルトとヒットラーがそれぞれ大演説会を開いたという記事を読んだ後に「余も亦風雲に際会セバ再び国民運動を起こす日も来るべし」と記している処からも分かる。換言すればナチスやファッショの政策を支持したというよりも、成功した大衆運動としての側面を支持していたといえる。従って当然予想されるように、世界史の方向を欧米先進国のファッショ化のうちにみて、ヒトラーやムッソリーニを賛美したのは勿論、イギリスの議会政治も国民の地滑り的な支持で当選したローズベルトもまたファッショだといったりしていた松岡洋右による政党解消運動<sup>168</sup>には批判的であった<sup>169</sup>。

一方、鶴見は自由を尊重し独裁を憎んだが、しかしそれでは説明しきれない言動もたしかに残している。例えば、彼は学会・実務で支配的だった美濃部達吉の学説が政治的に屈服させられていった天皇機関説事件について「政治的に立廻らざりし為めである<sup>170</sup>」という極めて冷ややかな反応を示している。また、血盟団事件の被告に対し、手段は誤っているがその心事は諒とすべきであると考えていた<sup>171</sup>。さらに次章でやや詳しく検討するように、斎藤隆夫除名にも最終的には賛成している。

しかしその一方で、彼は滝川政次郎が大化改新に関する論文による筆禍事件に巻き込まれた時にはその生活をみなで支えることを申し出ているし<sup>172</sup>、津田左右吉の記紀の研究を読んで大いに感銘をうけ、このような優れた学者を迫害することは国のためにならず「If the force of darkness wins it will retard the progress of the nation in the end. <sup>173</sup>」として憤慨している。

これらを統一的に解釈する手がかりは、次の清沢冽の日記の記述から得られる。

---

<sup>167</sup> 同上 2 - 3 頁

<sup>168</sup> 三輪公忠『松岡洋右』（中公新書、1971年）131 2 頁

<sup>169</sup> 『鶴見祐輔日記 1934年』昭和9年2月13日条

<sup>170</sup> 『鶴見祐輔日記 1935年』昭和10年4月10日条

<sup>171</sup> 『鶴見祐輔日記 1934年』昭和9年11月22日条

<sup>172</sup> 同上昭和9年6月18日条

<sup>173</sup> 『鶴見祐輔日記 1941年』昭和16年1月1日条

「永井[柳太郎]や鶴見には美文があるが、思想なし。 もっとも鶴見君は僕に厚意を持ち「必要ならばいつでも援助するから」といつていた。<sup>174</sup>」

すでに見てきたところから分かるように、鶴見が自由や議会政治を大事にし、独裁を嫌悪する強い信条をもっていたことは間違いない。したがって思想が無い訳ではない。しかし、たしかに鶴見には目前の物事に流されやすい側面があり、また、必ずしも体系的に物事をとらえない傾向があった。その姿を傍から見ていた清沢にはそれが思想の欠如と見えたのであろう。実際、あれだけ議会政治が大事だと主張したのにも関わらず、政党政治を哲学的に基礎付けていた筈の天皇機関説<sup>175</sup>の運命に無頓着であり、或いは青年将校や民間テロリストの心情倫理に同情していたというのは、鶴見が体系的・哲学的に物事を突き詰めて考えないタイプの人間であったことを強く示唆しているように思われる。ナチスやファッショの哲学的側面を無視して運動の形式のみに注目した事についても同じ事が言えるかもしれない。そして鶴見自身もこのことをはっきりと認識していたようで、次のような興味深い自己分析を残している。

「自分は...深く思考する哲人・克明に研究する科学者にあらずして外界に敏感に反応する **journalist** である。故に自分八何時も変化する外界を求めて動いて居る事可 必要なのだ。<sup>176</sup>」

これは、鶴見が長期の外国講演旅行を毎年のように繰り返した最大の理由であると思われる。旅行で忙しい日々を送ると思索の時間が奪われ、自己の狭い経験を絶対化しがちなので却ってよくないと考えていたとされる清沢<sup>177</sup>と対比してみると興味深い。

以上要するに、さまざまな限界はありつつも、鶴見は自由主義を思想として重視しつつ、また国内政治体制としても自由な弁論を闘わせることで国を動かしていく議会政治は絶対に変えるべきでないと考えた点でも一貫しており、後に見るようにしばしば議会政党を糾合する事で軍を抑え、戦争への途をどうにかして回避しようと努力を行った。従って鶴見和子の「公人としての父は、自由主義を説いたが、おこないはべつであった<sup>178</sup>」という評価は鶴見の一面のみを強調したものであり、いささか政治家としての鶴見に対する評としては酷に過ぎるように思われる。なお、同時代の自由主義に好意的な論者からは、鶴見は米国でのさかんな講演活動を評価され「小新渡戸博士の

---

<sup>174</sup> 清沢 『暗黒日記』 昭和 18 年 7 月 9 日条

<sup>175</sup> 三谷太一郎「天皇機関説事件の政治史的意味」『近代日本の戦争と政治』（東大出版会、1997年）

<sup>176</sup> 『鶴見祐輔日記 1930年』 昭和5年6月11日条

<sup>177</sup> 北岡伸一前掲書 125 頁

<sup>178</sup> 鶴見和子「自分と意見のちがう子供を育てた父親への感謝」北岡寿逸前掲書 35 1 頁



観がある」として、清沢や馬場恒吾らとともに、共産主義と帝国主義の隆盛によって凋落した自由主義の孤塁を守る貴重な自由主義者の一人と目されている<sup>179</sup>。

### 第三章 近衛時代の到来と敗戦まで（1937～45）

まず第一節で宇垣への鶴見の期待の中身およびそれが如何に挫折したかを明らかにし、続く第二節で近衛内閣成立以降鶴見の政策論が著しく軍部に対して融和的となり、日中戦争開始後の日本の対外膨張を支持していったかを示す。最後に第三節では太平洋戦争開始以後敗戦までの鶴見の議論の変遷を簡単にたどる。

#### 第一節 宇垣内閣流産の衝撃

国内外にわたる革新的政策を合法的に実行できる英雄として、鶴見は古くから陸軍出身の政治家宇垣一成に注目<sup>180</sup>してきた。確認出来る範囲では、すでに昭和3年に明政会を率いていた時点で宇垣を首班とする政権の実現のための協力を申し出て宇垣の了解を得ており<sup>181</sup>、その後も折に触れて政治的な節目で宇垣と相談している。また昭和6年には政治上の師である尾崎行雄と宇垣首班の可能性について意見を交わしていた<sup>182</sup>し、後述するように宇垣内閣流産後も折に触れて宇垣擁立を考えている<sup>183</sup>。前章の第2・3節で述べたことから、鶴見の宇垣への注目は日本の膨張という「革新的政策を部分的には採用しつつも、同時にそれを立憲的枠組みの中で処理する政策体系<sup>184</sup>」を提示できる指導者とみなしたためではないかと思われる。

では、より具体的に1937年1月末に成立するかに見えた宇垣内閣<sup>185</sup>に鶴見はどのような政策の

---

<sup>179</sup>高木信雄「リベラリスト人国記」『中央公論』昭和8年4月280-2頁

<sup>180</sup>「宇垣一成論」を『改造』昭和4年7月号に発表している。

<sup>181</sup>「宇垣一成氏との会見」（1928年8月3日）（「鶴見文書・書類497」）によると、「貴下若し、余を信せば<ママ>、この同志を近衛兵として決起せよ。然らば、茲に真剣なる国民運動起り、昭和維新の端緒を開き得べし」との鶴見の要請に対し、宇垣は「全然同感。よろしい。その積りにて準備なさい」と答えたという。

<sup>182</sup>昭和6年4月30日付尾崎行雄書翰（「鶴見文書・書簡1029-1」）

<sup>183</sup> 但し、宇垣の側でも鶴見のことを同様に評価していたかは疑わしい。阿部内閣倒壊直前の1940年1月に宇垣に近い大蔵公望から宇垣内閣の組閣名簿の全容を見せられた鶴見は、この顔触れでは不十分であるとして非常に失望して、その直後から宇垣首班では駄目だということを説いて回っている。この事実からは、組閣名簿すら全面的には鶴見に伝えられていなかったことが分かる。『鶴見祐輔日記 1940年』（「鶴見文書・書類3783」）昭和15年1月10・12・13日条。この1940年の一時期以外は基本的に鶴見は宇垣首班に期待していたと言える。

<sup>184</sup> 酒井前掲書 146頁

<sup>185</sup> 尤も、鶴見の軍部抑制という宇垣への期待とは矛盾するが、陸軍内部では「陸軍が宇垣内閣に陸相を送らざるは、…宇垣大将個人に対するものにして、別に其政策に反対するが如き感情的のものならずと参謀総長的<ママ>通牒」があったという。『畑俊六日誌』（みすず書房、1983年）昭和12年1月25日条。

実行を期待していたのであろうか。

まず、第一に 1932 年 10 月の訪欧中に、彼が「日本人として米国上下に信用ある唯一人」とみなしていた松平恒雄駐英大使に宇垣内閣成立の暁の外相就任を要請し、内諾を得ていた事実<sup>186</sup>から分かるように、英米との関係を調整し「今日の日本の国際的信用失墜を救ふ」ことを宇垣内閣に期待していた。

第二に、今までも述べてきたように、鶴見は単に英米との関係調整を目指すだけでは不十分であると考え、人口圧力に悩む日本の経済的拡大のための南進を、英米との摩擦無しに実現することを期待していたように思われる。

第三に、国内的な権力基盤としては、すでに見たように既成政党自体には失望していた鶴見ではあったが、依然として議会政治の枠内で「第二の二二六事件」を防止し国内・国際両面の危機を乗り切れることには希望を抱いていた。そこで、「人傑出現して二大政党を一丸とし徹底的政治を実行すること<sup>187</sup>」即ち、宇垣が二大政党を中心とする圧倒的多数の議員の支持を得て軍部を統制することを期待していた<sup>188</sup>。そこでは二大目標とされた国際的膨張と国内の肅軍・社会改革のうちの後者、つまり国内政治の安定化が優先されていた。そして既に述べてきた通り、鶴見は対米関係調整のためには日本が民主主義的な政体をとることが絶対に必要だと考えていたため、宇垣の下で議会政治を擁護するということは同時に対外関係改善の絶対条件でもあると考えた。

以下、宇垣擁立に関連する鶴見の具体的な行動を追ってみる。内外の危機を乗り切れる強い指導者として宇垣に期待をかけていた鶴見は 1936 年 1 月に民政党<sup>189</sup>入りの後、宇垣の首班仕事を始めた。同年 12 月に民政党外交特別調査委員会での「会合の内容貧弱」により政党には「到底今日の重大時局を担当するの力なきことを痛感<sup>190</sup>」したため、その直後に徳川義親侯爵に依頼して宇垣内閣実現への協力と資金援助の内約を得る<sup>191</sup>。そして 1937 年 1 月末に宇垣に大命が降下するとすぐに宇垣邸に馳せ参じた上、組閣に協力。徳川義親に陸軍の取り纏めを依頼した他、山屋他人海軍大将には同じ海軍出身の百武侍従長に優諍降下方説得を要請して容れられ、田沢義輔に湯浅内大臣説

---

<sup>186</sup> 『鶴見祐輔日記 1932 年』昭和 7 年 10 月 23 日条。

<sup>187</sup> 昭和 11 年 6 月 5 日付宇垣一成宛鶴見祐輔書簡『宇垣一成関係文書』294 頁

<sup>188</sup> 1936 年の広田内閣成立から 1937 年 1 月の間に書かれたと思われる「政局メモ」(「鶴見文書・書類 351」)の中では、「政党内閣実現の四条件」として「肅清選挙の徹底」「模範議会の継続」「政党の国策研究」と共に、「民政と政友の提携」が挙げられている。

<sup>189</sup> 既述のように鶴見は既成政党を批判してきたが、実際の外交政策に影響力を与えるという目的のための「次善の途」としてやむなく民政党に属することを選んだ。『鶴見祐輔日記 1936 年』昭和 11 年 1 月 16 日条

<sup>190</sup> 『鶴見祐輔日記 1936 年』昭和 11 年 12 月 14 日条。

<sup>191</sup> 同上昭和 11 年 12 月 17 日条

得を要請して断われている<sup>192</sup>。このように奮闘した鶴見であったが、結局宇垣内閣は陸相を得られずに流産してしまう。

この直後に書かれた「宇垣一成の心境<sup>193</sup>」というエッセイの中で、挫折はしたがこれで宇垣は国民的期待を集める指導者の資格を得たと書いていることから、少なくとも鶴見はこの時点では依然将来の宇垣政権実現に相当強い期待<sup>194</sup>を抱いていたことが分かる。次に来た林銑十郎内閣に対する鶴見の批判もこの文脈で理解できるものである。

例えば、3月11日の林内閣への外交質問は基本的に既に1月末に用意されていた広田内閣への質問演説をほぼそのまま転用したものであった<sup>195</sup>。そして、そこでの外交批判の骨子は、第一に日独防共協定及び日伊協定によって日本がファシストの側に立ったと誤解され、欧州の戦雲に巻き込まれる可能性が高まってしまったがこれは絶対に避けるべきであること、第二に万一の場合に実力を用いる決意もなしに強硬な要求を行なう「恫喝外交」は中国を反日に追いやるだけで何ら効果がないばかりか、列国との関係も悪化させるものであり、今般の川越・張会談は失敗であるというものである。

このように、昭和12年初めの段階では宇垣もしくはそれに相当する人物を二大政党の上に戴いて軍を押さえ込み、英米との関係を決定的に悪化させることを避けることを鶴見はまだ考えていた。しかし、この認識が大きく変わる契機となったのが同年六月の第一次近衛文麿内閣の成立である。

## 第二節 近衛時代の到来と鶴見の変化

では、鶴見はどのように近衛内閣の成立を受け止めたのだろうか。若干長くなるが、重要な部分なのでそのまま引用する。

「近衛内閣の出現と共に、時代八廻転した。年若き首相可<sup>〃</sup> 同年輩の賀屋を蔵相に吉野を商相として出現したこと並に彼等に対する国民の圧倒的好感八確かに今日の日本可<sup>〃</sup> corner を turn したることを明示する。...[自分が]今日民政党内に雌伏して時代より忘れられつつあるを顧みれば比俛にて八全く時代より逸し去るべし。その根本の理由八余可<sup>〃</sup> 国策を調査せず表面に立ちて闘八ざりし為めである。今日に於て余八決然として立上る必要ありと思ふ。依て先

<sup>192</sup> 『鶴見祐輔日記 1937年』(「鶴見文書・書類3778」)昭和12年1月23日・27日・28日条

<sup>193</sup> 「宇垣一成の心境」『中央公論』昭和12年3月号

<sup>194</sup> 組閣失敗後の依然とした宇垣への期待は鶴見に限られるものではない。例えば、翌年の宇垣外相の拜謁に侍立した侍従入江相政は、「お上の御信任の程も拝せられ、次期総理の資格十分である。」としている。朝日新聞社編『入江相政日記』第一巻(朝日文庫、1994年)昭和13年6月20日条。

<sup>195</sup> 「首相及び外相に対する質問演説」(「鶴見文書・書類32」)(1937年1月~2月の「旧稿」と「新稿」を含む)

づ民政党刷新の一大烽火を挙げ、成らばよし成らずんば脱党し代ギ士をも辞するの覚悟を以て闘はんと決心す<sup>196</sup>」

即ち、ここではまず近衛内閣成立と共に時代が大きく移り変わり、自らが政治権力の中枢から取り残されてしまうことへの危機感が表明されており、次にその時代の変化に対応するための手段として民政党を内部から革新することが企図されている。

では、その革新の具体的内容とはどのようなものなのだろうか。昭和 12 年執筆と思われる資料「民政党改造私案」<sup>197</sup>にその詳細が記されている。まず、状況認識としては「人口増加と生活難」「第二次産業革命」「対外関係の大変化[中ソの台頭]」という 3 つの原因から、日本は大きな転換期にある。それにも関わらず従来どおりの政党対軍部という国内政治上の対立が続いているために大きな相克摩擦を生じるに至っているが、現在の日本にはその余裕はない。そこで政党と軍部の「相互理解」が必要であり、その為には、国際関係の現状をきちんと踏まえた上で軍事費の適正な水準を定めることが必要となる。具体的には、万一英米ソが連携するのならば軍事費は際限がないが、

「ソ連を英と米より離隔し得ば、軍備は五カ年計画をもつて足る。そしてソ連にのみ備えるという後者のシナリオを取るのならば、日本の財政は充分これを賄える。その上で、軍拡競争を世界的に続けていったとしても、やがて物価騰貴によって頭打ちとなり、各国がどこかで軍事費抑制へと転じざるを得なくなる。従って「比の時期まで日本が辛抱すれば、今日の大陸政策を放棄せずして龐大予算を縮小し得るの日来るべし。」その後「北方の危険鎮静の上は、日本は南進すべし。富は南に在り。これによつてのみ日本国民の生活は安定すべし。」

ここでは極めてアクロバティックな政策論が展開されている。即ち、仮想敵をソ連だけに絞ったうえで当面の軍拡を軍民調和の上で行なえば、やがて来る財政上の圧迫から世界的な軍縮へと転じることができ、将来的には英米との協調が可能になり、その暁には南進も可能である、というものである。これを一読してまず生じるのは、なぜ世界的な軍拡を軍縮へと転じることが出来るのかという疑問であろう。安全保障のジレンマを放っておけば自然に収束せず、危機を亢進させると考えるのが通常であり、どこかで政治的な意志による明確な妥協がなければ軍縮が実現することはないと考えるのが常道であると思われる。しかし、実はより深刻なのは、どのように南進と対英米協調を両立させるのかという疑問である。だが、ここでも今までと同様、鶴見は南進と対英米協調の両立を全く疑っている様子が無い。この事からは、鶴見の対外政策論の全ての根本が、英米との衝突をさけつつ南進を実現することにある事がよくわかる。関嘉彦によると鶴見はアメリカと話をつけることでニューギニアを日本が平和的に買収してそこに大量の殖民をすることで資源不足と人口問

<sup>196</sup> 『鶴見祐輔日記 1937 年』昭和 12 年 6 月 7 日条。

<sup>197</sup> 「民政党改造私案」(『鶴見文書・書類 204』)、同上昭和 12 年 6 月 15 日条参照のこと。

題を一挙に解決することを語っていた<sup>198</sup>という。楽観的なまでの南進と対英米協調の両立への自信は、確かにこのような破天荒な構想が背景にあったことを想定しなければ説明困難であると思われる。

さて、このように政党を内部から革新して軍との調和を図るべきだと考えた鶴見は、6月中は盛んに民政党革新の試みを行い、29日には勝正憲らと新党樹立について協議を行なうが、なかなか纏まらず、具体的な行動にまでは至らなかったようである<sup>199</sup>が、この時協議した議員とはその後も時々集っている。

以上のような近衛内閣成立後軍部に対して融和的になった政策論からして、7月7日に日中戦争が始まった際、一方で対米関係の悪化を懸念<sup>200</sup>しつつも鶴見が戦線拡大を積極的に支持したことは理解できる。この時期の鶴見について注目されるのは、武藤章らと共に日中戦争不拡大派の石原莞爾第一部長に反対した拡大派の田中新一軍事課長<sup>201</sup>の政策論を絶賛している点である。それは具体的には、第一に、中国の約束履行確保のためには兵力がないと無理なので日本は即時の撤兵は出来ない、そして第二にこの好機を活かして青島から新疆を経て中央アジアまで日本の勢力を浸透（penetrating）させるべきだ<sup>202</sup>とする点について「He curiously had the same view as I<sup>203</sup>」というものであった。かつて1934年には藤本書記生失踪事件の解決により一時悪化しかけた日中関係が緩和したのに安堵していた<sup>204</sup>ことに比べると、如何に近衛の登場によって鶴見の政策論の中で対外的膨張が持つ優先度が大きく上がったのかがよく分かる。

しかしすぐに付け加えなければならないのは、鶴見はこのような膨張的な対中政策の実行と日米の了解が両立すると考えていたことである。依然として鶴見は南進と対米協調は両立可能だと考えていた。しかし勿論、客観的な米国の対日態度は非常に悪化していた。10月5日には有名なルーズベルト米大統領の「隔離演説」が行なわれ、その翌日には国務省が日本は九国条約・不戦条約に違反していると批判し、連盟でも同趣旨の決議が通った。

---

<sup>198</sup> 関嘉彦「太平洋協会時代の鶴見さん」北岡寿逸前掲書 202 頁。すでに述べたように米国識者の中には確かにこの構想を支持する意見もあったようである。「連盟脱退と日米協調」書類 343

<sup>199</sup> 『鶴見祐輔日記 1937年』昭和12年6月29日条

<sup>200</sup> 8月には国際文化振興会から国際新教育会議出席のためオーストラリアを訪問しているが、その出発前に近衛首相に対して、対米関係調整で自分が必要になったらいつでも使ってくれとの伝言を残している。同上7月28日条。

<sup>201</sup> 筒井清忠『昭和期日本の構造』（講談社学術文庫、1996年）340 - 1 頁

<sup>202</sup> 例えば、十河信二の北支開発案を聞いた鶴見は「Most interesting.」と深く興味を示している。『鶴見祐輔日記 1937年』昭和12年11月9日条

<sup>203</sup> 同上昭和12年11月5日条

<sup>204</sup> 『鶴見祐輔日記 1934年』昭和9年6月14日。事件については石射猪太郎『外交官の一生』（中公文庫、1986年）238 - 40 頁参照。

「米政府八遂に日本八九国条約違犯と声明し聯盟も亦しか決ぎず。日本の前途深憂に堪えず。…余八たとへ外務省一部の者が何と邪魔しても敢然として比身を挺して君国のために捧げんと決心す。余はかかる時機の為に過去二十年間比の国際人としての技能と経験とを積み来りたる也。<sup>205</sup>」

以上から分かるように、アジアで軍事的に膨張しつつも、アメリカにそれを一定程度是認させるという、通常は矛盾すると思われる政策目標を両立させることを鶴見は自分の使命と考えていた。その前提となる状況判断としては、まず外交的には、すでにスティムソン外交の失敗で明らかになったように、極東の領土保全というのは「米国の実力以上の主張」であり、米国は東洋の安定勢力として「日本を信じて委任」するべきだ、即ち日本の勢力圏を承認すべきだという判断があった。そして経済的には「米国の極東貿易の主体は日本、次可支那也。何ぞ日本と合作してこれを増加せんと努力せざるや」という判断が存在した<sup>206</sup>。

鶴見が日米関係調整のための具体的な政策として何によってこの時点で米国との了解をつけようと考えていたのかを特定する手がかりはないが、彼が翌 38 年の訪米で行なおうと試みた 3 つのプロジェクトから、対米関係調整のための方法の大体の方向性については指摘できる。第一に彼はニューヨークに日本についての書籍を集めた情報図書館を設立する作業に携わっている<sup>207</sup>。第二に米国から借款を得て綿花を輸入することを試みている。そして第三に、対米宣伝のための機関を設けることを考えている<sup>208</sup>。即ち、鶴見が目指したのは、第一に文化的に日米の相互諒解を深めるための第一歩として米国側の日本研究の貧弱さを少しでも改善<sup>209</sup>することであり、第二に経済的な相互依存関係を深めることで戦争の危険を少しでも防ぐこと、第三に的確に日本の政策目標を伝えることで関係改善を進め易くすることであったといえる。なお、今回の訪米では鶴見は今までと異なり、大々的な講演旅行は一切行っていないが、それほど反日感情が高まっていたということである<sup>210</sup>。

このうち最も注目されるのは、鶴見のリベラルな国際政治観が表れている、綿花への借款を米国

---

<sup>205</sup> 『鶴見祐輔日記 1937年』昭和12年10月8日条

<sup>206</sup> 「日米関係の調整」1937年12月26日「鶴見文書・書類 3885」

<sup>207</sup> 情報図書館については結局、国際文化振興会や外務省が推す前田多門が責任者として実施に当たることになり、おそらくこれをきっかけかとして学生時代以来刎頭の仲であった前田と疎遠になった。昭和13年9月15日付け鶴見祐輔宛永田秀次郎書簡（「鶴見文書・書簡 485 - 2」）

<sup>208</sup> 対米宣伝機関は、1936年の訪欧で懇意になった吉田茂駐英大使からすすめられた、外務省から独立した「P[ermanent 或いは Political か?] Propaganda Bureau」即ち宣伝機関設置案を実現しようと考えたものであると思われる。『鶴見祐輔日記 1936年』昭和11年10月2日条

<sup>209</sup> 前掲「日米親善問題座談会」45頁で、鶴見はアメリカの日本研究が「非常に間違つて居る」としてこれを是正する必要性を強調している。

<sup>210</sup> 『米国の支那事変観とその苦悩』5 - 8頁

で実現するというアイデアである。まず 37 年 10 月に賀屋蔵相に借款案について話して諒解を取り付けた<sup>211</sup>。鶴見は、翌年訪れた米国の商工会議所で、漢口陥落によって日本軍の大規模な軍事作戦が終わるのであれば綿花借款を実現できるだろうというアドバイスを受けたことに力を得ている。さらに、国際金融資本家としての立場から従来比較的親日的であったモルガン商会のラモントと接触を試みている<sup>212</sup>。このように一時は可能性があるかに思われた綿花借款であったが、しかし、日本軍の中国での進撃が止まらず、12 月には首都南京を陥落させ、それどころかその過程において米国の砲艦パネー号を撃沈してしまうような状況の中では、たとえ日本に借款を与えようとするアメリカ人がいたとしても萎縮してしまったのもやむを得ない。結城豊太郎日銀総裁に借款交渉の中止を伝えた電文の草稿には「パネー号事件等ノ為メ悪化シタル対日感情ノ未ダ治ラザル今日 交渉ヲ開始スルコトハ却テ将来ノ成功ヲ妨グル結果アリ」として、もう少し時機をまった上で、政治的に或いは事務的に話を進める方が得策と判断したとある<sup>213</sup>。経済的な結びつきを深めることによって関係を調整していこうとする試みも挫折に終わった。以上のように、鶴見が 1938 年にアメリカに赴いて対米関係改善のためにおこなおうとした事業はいずれも狙い通りにはいかなかった。そして、これが約 20 回にわたった戦前戦中の鶴見の最後の訪米であったことはあたかも日米関係の将来を暗示するかのようであった。

一方その頃、欧州の国際関係は緊迫の度を加えていた。9 月にチェコ問題をめぐって一触即発の雰囲気となったが、幸いミュンヘン協定によって当面の危機は回避された。万一欧州で開戦となると、日独防共協定以来ドイツへの接近を深めていた日本もこれに巻き込まれるのではないかと危惧していた鶴見は、「その回避せられしハ日本の大幸運なりし乎<sup>214</sup>」と安堵している。

では鶴見はこの時期の国際関係の動きをどのように認識していたのだろうか。

まず、彼の欧州情勢への関心の中で最も大きな部分を占めていたのは、ソ連のスターリンが一国社会主義から転じて積極的に世界の共産主義運動を陰で煽動しているのではないかという一種の陰謀史観<sup>215</sup>であった。1938 年のスターリンの「一国社会主義に対する教書」がその証左であるとされ、スペイン動乱、フランスの人民戦線内閣成立、中国での共産党の活発化と偶発的な形で日中戦争勃発がその政策の顕在化したものだと考えられていた。そして、スターリンの目的は世界各国に動乱を引き起こすことであり、「これによつて彼はソ連進出の機会を窺つて居るのである」とされた。

---

211 『鶴見祐輔日記 1937 年』昭和 12 年 10 月 29 日条

212 『鶴見祐輔日記 1938、1943、1944 年』昭和 13 年 9 月 26 日、10 月 7 日条

213 「綿花の件報告電文草稿」(1938 年)(「鶴見文書・書類 1590」)

214 「Munich Accord の observation」(1938 年 10 月 1 日)(「鶴見文書・書類 360」)

215 「露西亜に関する考察」(1939 年 11 月 3 日)(「鶴見文書・書類 3885」)

そしてこのような観点から当時の欧州情勢を眺めた結果、当然ミュンヘン協定は独英がソ連の世界革命輸出の脅威を明確に認識したうえでこれに備えるために妥協を結んだものとして解釈され、さらにフランスでダラディエが共産党と袂を分かったことも同様に解釈されている。そして今や欧米列強のうちで 19 世紀的な感傷的リベラリズムを信奉しているのは米国のみであり、今後ソ連は米国での攻勢に力を傾けるであろうとされた。

ここでは最早、嘗てのように体制の違いを認めた上で、ソ連との共存を続けられるとは考えられていない。そして日本との関係についても「Stalin の方針八恐らく西を守つて東に向かふことであらう。」とされ、米ソ接近及びソ連の中国共産党への挺入れを極度に警戒している。この極端なまでのソ連への脅威感はこの後の鶴見の議論に大きな影響を与えることになる。

ここで 1939 年の鶴見の具体的な行動を追ってみると 4～5 月に中国の視察に出かけ、帰国後は綿業業者などと懇談している他、天津租界封鎖問題でのイギリスとの関係悪化を懸念したりしている<sup>216</sup>が、この年の最大の政治活動は、何といっても前半は日独軍事同盟への反対であり、後半は日米太平洋協約案の作成と阿部首相への働きかけであった。

1 月に総辞職した近衛内閣のあとを受けた平沼内閣は前内閣以来の課題である日独防共協定の強化に取り組みつつあった<sup>217</sup>。では鶴見はなぜ対独接近に反対したのだろうか。まず経済的には、既に述べたように鶴見は自由通商・自由移民が最も望ましいとの立場を理想としており、ブロック経済化がやむを得ない趨勢であることは理解しつつも、決してこれを積極的には評価はしていなかった。さらにより重要な事は、外交的に、対独接近をすれば日本が軍国主義化してファシズムを信奉する国になったというアメリカの誤解を助長してしまう可能性が高かった。しかし既に述べたように日本の国内政治体制がリベラルであることが対米関係調整の必要条件だと考えていた鶴見にとって、これは是非とも避けたい事態であった。

まず、3 月 11 日に衆議院予算委員会で有田外相に向けて鋭い質問をしているが、それは具体的には、以下のようなものである。

「(2) 米国ハ Munchen 会議以来対日悪化 これ全体主義国家に対する反感...[そこで]日本ハ防共協定ハ防共以外何物でもなきことを明とせよ」

「(4) モンロー主義と近工声明との類似性を米国民に知らせ[よ]」

「(6) 英とハ上海の具体的問題を解決せよ<sup>218</sup>」

ここにはまず鶴見の米国観と英国観の違いが出ている。即ち、英国は実際的なので、国内政治体制などにはあまり関係なく、実務的に外交交渉を行えば関係を調整できるが、米国は理念を重視する

<sup>216</sup> 『鶴見祐輔日記 1939 年』昭和 14 年 5 月 9・11 日条

<sup>217</sup> 平沼内閣の対米関係調整による日中戦争解決の模索という一面については加藤陽子『模索する 1930 年代』(山川出版社、1993 年)第四章参照。

<sup>218</sup> 『鶴見祐輔日記 1939 年』昭和 14 年 3 月 11 日条



側面が強いので、日本がイデオロギー的にどのような体制であると認識されているのかが関係調整に大きな影響を持つ。また、米国がモンロー主義で米大陸を囲い込んでいる以上、日本もアジアに自らの広域圏を持つべきであると考えていた事もうかがえる。

5~6月にかけては吉田茂や町田忠治民政党総裁を訪い、日独軍事同盟反対について協議している<sup>219</sup>ほか、8月には民政党外交調査委員会で、永井柳太郎委員長が日独同盟賛成の方に衆議を強引にまとめようとしていたので他の多くの議員とともにこれに強硬に反対し、決を採らせないことに成功している<sup>220</sup>。このように鶴見らが反対しているうちに、独ソ不可侵条約の成立によって8月末に平沼内閣は倒れ、日独同盟問題も暫く棚上げということになった。

その後暫くは日記の記述が途絶え、10月以降は「日米太平洋協約案」を太平洋協会で作成し、これを阿部首相その他に手交した他、しばしば阿部首相や小磯国昭、民政党有志と懇談している。この時の協約案は一応太平洋協会として作成したものではあるが、おそらくかなり鶴見の政策志向が反映されたと見られる。鶴見の日米関係観がよく出ており、実現可能性は一まず措いておくとしても、興味深い条項を含んでいる<sup>221</sup>。

第一条：相互不可侵

第三条：米国が「満州国ヲ独立主権国家トシテ承認スル」

第四条：日本がフィリピンの領土保全を保証

第五条：相手国との友好関係を害する恐れのある現行法規のなるべく早い改定

米側は排日移民法、現行の保護関税。日本側はアラスカ付近の漁業

第六条：「グアム」島ヲ日本国へ売却スルコトヲ同意ス」

第七条：中国での立場の調整

日本の北支・蒙疆での特殊地位を米側が承認

日本側はそれを前提に門戸開放を宣言

第八条：九国条約を中国・西太平洋の現状に合うように改訂

第九条：期限は8年

一読して明らかなように、日本側に非常に有利な内容となっており、これでは到底対米交渉の基礎となりえなかったと思われる。しかし、個別の条項をみると面白い条件を含んでいる。まず、五条でやはり両国間の関係改善の障碍として排日移民法の改正を要求している。経済的には大した問題でないことをよく知りつつも、やはり24年の移民法はかつて新渡戸や鶴見を含む自由主義者・親

<sup>219</sup> 同上昭和14年5月15・18・19条ほか

<sup>220</sup> 同上昭和14年8月11日条

<sup>221</sup> 「日米太平洋協約案」1939年（「鶴見・書類773」）

米派の日本国内での影響力を著しく削いだもの<sup>222</sup>であり依然として関係調整の大きな障碍だと考えられていたことが分かる。そして最も興味深いのが、同時に最も実現性が薄いと思われるのが、六条のゴム売却の条項である。日中戦争が泥沼化し相当に米国の対日感情が悪化している最中にこの条件を呑むことは、アメリカにどのような政府があっても不可能だと思われる。すでに、何度も指摘してきた鶴見の南進と対米協調の両立の可能性への願望の表れだと思われる。また、第三・七・八条は既に述べてきた、満蒙北支での日本の生存圏をアメリカが認めさせたいという彼の外政論が表れている。

鶴見は勿論真剣にこの構想による日米関係の調整を望んでいた。事実、この39年末頃には両国関係がこのままでは衝突へ至る可能性があるという危機感を表明した記述が日記に初めて現れてくる。

「日米関係八今日にして改善せずんバ次第に悪化の傾向あり。“第二の黒船来”たる危険あり。八十六年前 Perry 可<sup>レ</sup>日本の Open Door を要求せると同様今日の米国八その大海軍を擁して、支那の Open Door を日本に要求せるもの也。米国果たして戦争まで決意するか否か。自分も政治家たる以上、比の国難を救ふために一大決心を要す<sup>223</sup>」

しかし、米国との関係の調整はいかにも困難であった。しかも、既に国家総動員法が成立して議会の権限は大幅に削られ、彼の対米関係論の根幹であった日本国内での議会政治や言論の自由の維持は極めて困難になりつつあった。

このような情勢の中、鶴見は翌1940年1月に成立した米内光政内閣の内務政務次官に就任する。田中内閣にかつて打診された政務次官就任が12年後ようやく実現できたことに屈辱を覚えつつも、隠忍自重して受けた<sup>224</sup>。そしてその直後、日本の議会政治の試金石となった事件が持ち上がる。2月2日の所謂「反軍演説」に端を発する斎藤隆夫の除名問題である。

この演説は日中戦争解決の条件について政府を批判し、東亜新秩序や聖戦の美名に隠れて具体的な問題の解決が疎かにされていることを現実主義的な権力政治の観点から厳しく追及したものである。鶴見は演説前半の近衛声明や東亜新秩序についての批判は高く評価しつつも、後半の適者生存の哲学からする道徳外交や聖戦への批判にはあまり高い評価を与えていない<sup>225</sup>。このように軍を著しく刺激する演説を行ったことにより、民政党内では斎藤を懲罰委員会にかけたい党幹部とこれに反対する大多数の議員との間で厳しい対立が起きた。鶴見は当初は陸軍の介入を許すべきではない

---

<sup>222</sup> 北岡伸一前掲書 47 頁

<sup>223</sup> 『鶴見祐輔日記 1939 年』昭和 14 年 11 月 20 日条

<sup>224</sup> 『鶴見祐輔日記 1940 年』昭和 15 年 1 月 23 日条

<sup>225</sup> 同上昭和 15 年 2 月 2 日条

と考へ、議会政治の存在意義が問われているととらえて問題の重要性を的確に認識し、斎藤除名に強く反対した。

「This matter of Saito is a very serious one , affecting the life of parliamentary government of Japan.

There is no reason that we should be afraid of Army's humour.<sup>226</sup>」

そして一時は民政党内で親しい一宮房次郎や池田秀雄らと、もし党が除名を実行するのであればともに脱党して闘おうと相談している<sup>227</sup>。しかし、やがて、戦時中であるのにこれ以上国内で政争を行なって外国に内兜を見透かされるような事になっては元も子もないと考え始め、斎藤が自ら辞職することが最良の解決だという様に変えてしまう。その背景には、第一に、いつかは軍と対決してこれを抑えることが必要だが「比の問題を提げて軍部と一戦するは未だ時期に非ず<sup>228</sup>」という判断があり、第二に、このままめ続けると民政党及び政友会久原派が分裂してしまい、ただでさえ弱まっている政党の力をより弱めてしまうという判断<sup>229</sup>があった。しかしこの“今はまだ闘う時期ではない”という言葉は、犬養首相暗殺後政党が権力の主体から外されてきた期間に常に聞かれた遁辞であり、相応の理由があったとはいえ、結局のところ事態が悪化していくのをとどめる機会はなかなか訪れず、なし崩しに議会政治や言論の自由の形骸化は進んでいった。

その後、一時辞職を受け入れていた斎藤が辞意を撤回したことで再び民政党内は紛糾したが、遂には斎藤除名が決議され、鶴見は非常な憤懣を感じつつも衆院本会議で賛成票を投じた<sup>230</sup>。しかし、結局8月に民政党も含む既成政党が解党して大政翼賛会へと合流してしまった後になり、鶴見はようやくこの決断を後悔するようになり、除名に抗議して議員を辞職するべきだったと強く悔やんでいる<sup>231</sup>。かつて1936年のヨセミテでの太平洋会議で斎藤隆夫の議会演説を引用して「日本の liberal の亡びざるを語り、世界の同情と patience を<sup>232</sup> 求めたように、元来鶴見は斎藤を日本の自由主義者の第一人者として非常に高く評価していたため、その斎藤を議会から葬る決議に賛成票を投じたことは内心忸怩たるものがあつたと思われる。このようにして、優れた弁論を行なった議員を議会自らが葬るといふ議会政治の自殺行為が行なわれ、斎藤は「衆議院は私を除名したれども、他日国

---

<sup>226</sup> 同上昭和15年2月24日条

<sup>227</sup> 同上昭和15年2月3・24日条

<sup>228</sup> 同上昭和15年2月27・28日条

<sup>229</sup> 「米内首相との会談」1940年2月28日「鶴見文書・書類516」

<sup>230</sup> 『鶴見祐輔日記 1940年』昭和15年3月7日条

<sup>231</sup> 同上昭和15年10月21日条

<sup>232</sup> 『鶴見祐輔日記 1936年』昭和11年8月20日条

民は衆議院を除名する時が必ず来るに相違ない<sup>233</sup>」としてその悔しさを表現した。

このようにして政党の無力は誰の目にも明らかとなっていった。しかし鶴見は斎藤除名には賛成したものの、何とか日本の進路を立て直すべく 1940 年から翌 41 年前半にかけて、圧倒的多数の議員を集めた政党を結成すべく運動している。そこで目標とされたのはやはり対米関係の調整であった。40 年の 3 月にドイツの電撃戦が始まる前の時点ではあるものの、鶴見は欧州戦争が英米に有利に進むという条件の下であればアメリカが武力行使に出てくる可能性がかなり高いと初めて判断した。

「米國ハ日本の對外政策を阻止せん可 爲めに武力干涉の決意を爲しつつある如し。欧州の形勢にして英米に有利ならば日米開戦まで米國ハ前進し來たるやも知れず<sup>234</sup>」

また一方で、10 月にジャーナリストの小汀利得から今の政府の中堅以下の官吏はすべてソ連の強い影響下にあるという情報を聞きつけ、既に述べていたようにソ連の革命輸出の脅威を過大評価していた鶴見は深刻な脅威感を抱いた<sup>235</sup>。このようにして米ソの双方から日本が脅かされていると考えた鶴見は如何にかしてこの窮状を救うことを考えた。

「Three concrete problems are before me now.

“: Politically to defend Parliamentaryism

: Economically to fight disguised communism which is bringing about a crisis

: Diplomatically , to expedite the settling of Chinese war”<sup>236</sup>」

即ち、鶴見は議会政治擁護、統制経済化の阻止、日中戦争早期解決を喫緊の課題と考えた。しかし、政府の権限は大きいうえに政治体制の極端な分極化がすすみ<sup>237</sup>、しかも政党政治が復活する見込みが乏しい当時、代議士であるというだけでは政府の内政・外交政策に影響を与えるのは非常に難しかった。

そのため鶴見は多数党形成のための工作を進める一方で、実質的に自らが主催している太平洋協会を今後も発展させ、「日本民族の運命は太平洋上に在り」というスローガンによる運動を始めるこ

---

<sup>233</sup> 斎藤隆夫『回顧七十年』(中公文庫、1987年)157-8頁

<sup>234</sup> 『鶴見祐輔日記 1940年』昭和15年3月6日条

<sup>235</sup> 同上昭和15年10月29日条

<sup>236</sup> 同上昭和15年11月2日条

<sup>237</sup> 酒井前掲書140頁

とを企図した<sup>238</sup>。この運動の詳細は不明であるが、少なくとも太平洋協会で様々な国の資源や政治外交の在り方について研究を深めていったことは確認出来る。既に引用したように、1939年に協会に参加した関嘉彦に対して、日中戦争を解決してアメリカとの話をつけてニューギニアを買収し、平和的に南進する構想を語り、アメリカでの経験と人脈をアメリカとの交渉の為に活かすと語ったとされるのはこの頃のことである。

しかし、この回想は若干ニュアンスが緩和されているように思われる。たしかに鶴見が対米関係調整による「平和的」南進を最終的な目的と考えていたことは間違いないが、そのためには当面日本が弱みを見せずに毅然とした態度でアメリカに臨むことが必要と考えていた<sup>239</sup>。

翌1941年に入るとますます対米関係は悪化していった。しかも政治は軍部のいいなりであり、主体性を喪失していた。この状況の下、鶴見は依然多数党を形成して軍部を抑制することを模索し続けるが、それが纏まった成果を挙げた様子はない<sup>240</sup>。

一方の対米関係については、鶴見は国民の外交に関する知識が乏しく、衆議院の中ですら松岡洋右外相の無責任な強硬路線が野放しにされていることに非常に批判的であった。前年以来、松岡外相は三国同盟と日ソ中立条約をあわせてアメリカに圧力をかけることでその参戦を阻止しとしていた。このような綱渡りの政策に対して、鶴見は外交問題について「最も不評判なる正論を身を挺して唱へざるべからず<sup>241</sup>」と決意している。そして以下に見るように、この「正論」はおそらくアメリカを恫喝するのではなく、正面から外交交渉を行なって譲るべき所は譲り、妥協を実現することで戦争を避けるべきという議論だと思われる。若干長いがこの時期の鶴見の心象をよく伝える記述を引用する。

「学窓を出でてより三十一年。半生を日米関係改善の為に捧げたる我が身也。今一朝にして両国開戦ともならば、正にこれ両国の一大不幸事に非ずや。坐してこれを見るに忍びんや。半生の苦心一空に帰する八忍ぶべし。同胞百万の生命を捨てしめ、邦家を一大危難に陥らしめ、而して第三国をして漁夫の利を占めしむる可。如き八真に見るに忍びざる処也。一身を賭して正論を唱へ、而して尚ほ両国必至の勢いを止むべからずんば、これ天命也。一身を君国に捧げるのみ。<sup>242</sup>」

---

<sup>238</sup> 同上昭和15年12月10日条

<sup>239</sup> 同上昭和15年12月16日条

<sup>240</sup> 『鶴見祐輔日記 1941年』(「鶴見文書・書類3784」)昭和16年1月1・10・11・18・30日、4月26日、8月5日条

<sup>241</sup> 同上昭和16年1月28日条

<sup>242</sup> 同上昭和16年1月29日条

つまり、日米が開戦してもソ連が漁夫の利を得るだけであり、なるべくこれを避けるべきだ、というのがこの時点での判断である。この時点ではまだ独ソ戦も始まっておらず、それなりに鶴見の議論にも抑制が効いていた。しかし、6月に独ソ戦開始の噂を聞いたことで、この議論もまた変化をしていく。

「世界地図を開きて、天下分割の計を案ず。蓋し、各国連合してソ連を伐つ可。究局<ママ>に於て世界安定の根本策なればなり。<sup>243</sup>」

更に、独ソ戦が本当に始まったときは「日本のために八天佑と謂ふべし。以て北方の脅威を除くべし」として積極的に歓迎している。鶴見は英独戦はいずれドイツが勝利すると考えていたため、ドイツに加担して世界革命の策源地と想定したソ連を倒すことで、第一に共産主義による体制転覆という日本にとっての大きな脅威が一つ除かれると考えており、第二に少なくともソ連と戦うのであれば当面の対米開戦は避けられると考えたためと思われる<sup>244</sup>。鶴見の思考の中に最早かつての国際法尊重論は見る影もなく、数ヶ月前に結ばれた日ソ中立条約について何らの考慮も払った形跡がない。

しかしこの期に及んでも未だ鶴見はアメリカとの関係を悪化させることだけは避けるべきだと考えていた。独ソ戦開始後の6月25日に考えた外交政策論<sup>245</sup>では、第一にアメリカを牽制しつつ静観すること、第二に独ソ戦がドイツ有利に進展したら参戦して沿海州・北樺太を占領して後顧の憂いを除くこと、第三にこの際は南進は自制してまたの機会を待つべきだ、ということが構想されていた。ここで何よりも注目されるのは、今までほぼ一貫して南進と対米協調が両立しようと考えてきた鶴見が、対米関係の悪化をおそれて遂に明確に南進を自制すべきだとしている点である。さすがに南北両進を軍事的な形で行なった場合、米ソと対峙する二正面作戦を強いられる可能性があると考えて躊躇したものと思われる。

独ソ戦開始によって鶴見は日本も機を見てソ連を攻撃すべきだと考えるようになり、翌26日に松岡外相と面会して、ソ連を攻撃してアメリカとは関係改善することを説くが、逆にアメリカの参戦阻止のために三国同盟を結んだことを縷々説明されて松岡に説得されてしまう<sup>246</sup>。松岡外相は国

---

<sup>243</sup> 同上昭和16年6月19日条

<sup>244</sup> 例えば、ほぼ一年前ではあるものの、懇意の田中新一中将から「三方作戦ハヤラヌ積リ」との言

質を得ている。「会見メモ 田中新一中将」1940年10月30日「鶴見文書・書類523」

<sup>245</sup> 『鶴見祐輔日記 1941年』昭和16年6月26日条

<sup>246</sup> 「松岡外相会見メモ」1941年6月26日「鶴見文書・書類521」

民的な人気にも関わらず極めて冷静に外交を行なっているので安心した、とその日の日記に記しているので、よほど松岡に魅せられたと思われる<sup>247</sup>。

しかし、その松岡の知らない所で近衛は日米交渉を行っており、7月には事実上松岡を外すために第三次内閣を発足させた。政府の日米交渉の内容を鶴見がどの程度関知していたのかは分からないが、相当関係が悪化しているという程度のことは知っていたように思われる。

その間、7月にイギリスが船舶の損耗を抑える政策を採用したことで、独英戦がすぐには終わらないであろうと考え、今までのドイツ有利での早期決着という判断を長期戦へと変えることを余儀なくされ衝撃を受けた<sup>248</sup>。しかし、さらに鶴見に大きな衝撃を与えたのは、米国の在米日本資産凍結の報であった。基本的に外からの影響に日本の内政は大きく左右されると考えていた鶴見にとって、アメリカの圧力が強まることは直ちに「その結果内地に於ける政情益々悪化し、右傾の傾向甚し<sup>249</sup>」という事態を招来すると認識された。そして鶴見の議論によれば国内政治の右傾化はアメリカに悪印象を与え、連鎖的にさらなる対米関係の悪化をもたらす筈であった。

このようにドイツの早期勝利の望みが絶たれ、長期戦化を覚悟せざるを得なくなっていた鶴見にとって、アメリカが開かれた自由な世界を作ることにイギリスをある程度コミットさせた大西洋憲章<sup>250</sup>も所詮は「要ハ Status quo ante bellum の維持声明」であり英米に有利な現状維持のプロパガンダに過ぎないと否定的に受け止められた。またこの声明はドイツの行詰まりに英米が勢いを得たことのあらわれ、つまり英独戦がすぐには終わらないことの証であると考えられ、これに力を得た米国がさらに圧力を日本にかけてくることを懸念した彼は真剣に日米開戦を危惧し始める<sup>251</sup>。そして英米との対決の回避のために日本側の取れる選択の幅は殆んどなくなっていたが、鶴見はここに至って、大西洋憲章によって英米側があくまで現状維持に固執し日本に有利な平和的現状変更に応じる気がないのを見て遂に早晩の対米戦不可避を覚悟した。

しかし、9月に神中佐から海軍が一月以内の対米開戦の可否の決断を求めている最中だと聞いた時には、流石に予想外に切迫した状況に狼狽している<sup>252</sup>。10月13日には4月以来の日米交渉の内幕の情報を入手しており、一方で近衛が日米交渉をまとめれば軍内部で反乱を起こすものがあると予想し、他方交渉が破綻すれば戦争となり結局その場合にも国内動乱が起きるかもれないと予想している。さらに近衛が17日に辞職したことで、鶴見は次の内閣は戦争遂行のための軍部内閣であろうと予測し、最終的に日米戦争不可避の覚悟を固めた<sup>253</sup>。

---

<sup>247</sup> 『鶴見祐輔日記 1941年』昭和16年6月26日条

<sup>248</sup> 『鶴見祐輔日記 1941年』昭和16年7月18日条

<sup>249</sup> 同上昭和16年7月26・31日条

<sup>250</sup> G. John Ikenberry, *After Victory*, Princeton University Press, 2001, pp.172-3.

<sup>251</sup> 『鶴見祐輔日記 1941年』昭和16年8月16日条

<sup>252</sup> 同上昭和16年9月2日条

<sup>253</sup> 同上昭和16年10月13・17日条

### 第三節 日米戦争に臨んで

戦争開始の直前まで一貫して対米開戦回避の可能性を信じてきた鶴見であったが、遂に 1941 年 12 月 8 日、真珠湾攻撃の日を迎えることとなった。すでに見てきたように、欧州大戦への巻き込まれ回避及び対米衝突回避と日本の膨張の両立可能性を基本的な対外政策論の枠組みとしてきた鶴見にとって、この 2 つが真正面から衝突することを意味する日米開戦は大変な衝撃であり、戦勝の興奮にうかされつつも彼はその対外政策論の基本を大きく変えることを迫られることとなった。

「愕然として初めて開戦を知る...Yet my immediate reaction was joy over the victory...[どうやら日本海軍がハワイの米海軍を撃破したようなので、]The Pacific Ocean is now under Japan's control-just as the Mediterranean sea was under Greek control after Salamis.<sup>254</sup>」

ここでアメリカの大海軍の存在という、それまでの鶴見の膨張論に抑制をかけていた重石が外れた結果、鶴見の外政論は極めて機会主義的かつ膨張主義的なものとなっていった。この事は真珠湾攻撃を論じた論考の「世界史は転回す」という題名に端的に表されている。ここではアングロ・サクソンの「人種的差別観が、結局に於いて日米関係の根本的癌」であったとされ、日本と英米は完全なゼロサムの関係にあるので、賢明な米国政治家がいれば衝突発生前に西部太平洋から米軍を撤退させたであろうがそれをしなかったため、日本はやむなく「国家の生存と防衛とを確保する為めの」「正義の戦ひ」を余儀なくされた。そして日本の戦いは防衛戦争である為に、古来の歴史の例からして必ず勝つとされた<sup>255</sup>。

以下、開戦以後の議論の変遷を概観してみる。まずは日本の戦果の拡大を肯定しそれを基礎付ける為、1942 年には「大東亜共栄圏に魂を入れる事可 太平洋協会の使命である。...急激に膨張せる国々八急激に滅亡する危険あり。如何にして日本の今日の大占領地に恒久的政治性を与ふるかが重大事なり<sup>256</sup>」として、広大な日本軍の占領地域に政治的な一体性を与えることが重要であると考えた。より具体的には「大東亜高度国防国家」「広域経済圏」「大憲章」や儒仏道基回教を融合した「新しき『哲学』を基礎とする新理念」の創造が構想されている<sup>257</sup>他、対敵宣伝機関設置を陸軍の田中新一などと協議している<sup>258</sup>。翌 1943 年の前半には彼は依然として戦争の前途を楽観しており、今

---

<sup>254</sup> 同上昭和 16 年 12 月 8 日条

<sup>255</sup> 「世界史は転回す」『太平洋』昭和 17 年 1 月

<sup>256</sup> 『鶴見祐輔日記 1938、1942 年』（「鶴見文書・書類 3779」）昭和 17 年 7 月 12 日条

<sup>257</sup> 「メモ大東亜共栄圏内の新秩序」（「鶴見文書・書類 380」）

<sup>258</sup> 『鶴見祐輔日記 1938、1942 年』昭和 17 年 6 月 19 日条



回の日本のように、正義の立場からやむなく自衛目的で立ち上がった場合には「如何なる小国と雖くママ>、長期に亘つて大国と戦ひ屈せざるのみならず却て大国を敗北せしめる<sup>259</sup>」という心情倫理に基づく強気の観測を行なっている。

だが、その後米軍が攻勢に転じたため、同年も後半に入って次第に戦況が悪化してくると「若し南方を失ハバ日本の致命傷為也。我等八断じて南方を失ふべからず。<sup>260</sup>」として南方の戦略資源の産地との連絡が絶たれる事を憂慮し始める。さらに同年末に入ると戦争の長期的な見通しについても相当悲観的になってきており、大西洋憲章に対抗しつつ英米と日本の戦争目的が実は日本のそれと同じであることをも示そうとして採択された大東亜宣言<sup>261</sup>についても、「somehow I do not feel enthused over this ; hope this will not end in lip service.」として懐疑的な判断を示した上で、「武力戦にて果して南方を守り遂せ得るや未だ定かならざる今日、国民をして徒らに今回の宣言の如き美辞麗句に独りよがりせしむるは決して善事に非ず<sup>262</sup>」とし、戦争中であるのだから所詮軍事的に維持できなければどのような美しい理念での現状の正当化も無意味であるという、鶴見にしては珍しい冷静な批判を行なっている。

しかし、彼の戦争認識は結局の所、それほど冷静といえるものではなかった<sup>263</sup>。それは例えば、同年 12 月の今後の戦争の推移についての予想<sup>264</sup>に良く現れている。ここで鶴見は、今回の戦争でアメリカも日本とともに疲弊し尽くすために、戦後の世界文化の中心は罹災していないスペイン文化を中心としたものになるし、又、1947 年頃に開かれるであろう講和会議はマドリードかブエノス・アイレスで行なわれるであろうと予想している。ここで一言だけ付け加えておくと、鶴見の見通しはたしかに些か楽観的であったものの、多くの政治家の外交についての認識はさらに現実離れたものであった。例えば、清沢列は 43 年 7 月の段階で旧民政党の某有力政治家に「米国は、まだ頭を下げぬかのう」と尋ねられた鶴見が呆気にとられるあまり返答に窮したという挿話<sup>265</sup>を書き残している。

一定の限界はあるものの、彼なりに戦争の先行きを悲観し始めた鶴見は、翌 1944 年に入ると終戦にむけた動きを始める。まず 1 月に、予算委員会で大東亜宣言と大西洋憲章の比較や米国国内の動揺について指摘することで「国民に戦時外交の核心を知らしめ且つ米国恐るべからずとの安心を

---

<sup>259</sup> 「戦争目的論」1943 年 5 月 11 日『鶴見文書・書類 387』

<sup>260</sup> 『鶴見祐輔日記 1938、1943、1944 年』(「鶴見文書・書類 3780」) 昭和 18 年 11 月 2 日条

<sup>261</sup> 井上寿一『日本外交史講義』(岩波書店、2003 年) 108-9 頁。

<sup>262</sup> 『鶴見祐輔日記 1938、1943、1944 年』(「鶴見文書・書類 3780」) 昭和 18 年 11 月 7 日条

<sup>263</sup> 当時、二六会でしばしば鶴見と会って外交問題を論じていた清沢列は「鶴見君は戦争について常に楽観的だ」と批判的である。清沢『暗黒日記』昭和 18 年 11 月 26 日条

<sup>264</sup> 『鶴見祐輔日記 1938、1943、1944 年』昭和 18 年 12 月 12 日条

<sup>265</sup> 清沢『暗黒日記』昭和 18 年 7 月 12 日条

与へ<sup>266</sup>」ようとした。恐らく、単に国内世論を鼓舞したにとどまらず、米国側も疲弊していること及び、究極において自由で開かれた世界を作るという戦争目的が実は日本と英米で共通していることを示すことで、妥協による停戦の一助となることを目指したのではないかと思われる。次いで、マーシャル諸島での玉砕の報を聞いて危機感を高め、これ以上の被害が生じれば、ようやく「満州事変以来日本を引き摺り来りし勢力[軍部]ハ discredit せられて真の政治家現ハれ、真の拳国一致成り、national 八 disaster を最後の瞬間に防ぐを得べし<sup>267</sup>」と考えた鶴見は、再び「宇垣大将を擁して救国の一路に邁進せざるべからず」との覚悟の下、旧二大政党の議員を連携させた上での宇垣一成<sup>268</sup>擁立工作<sup>269</sup>に乗り出したが、結局この動きが実を結ぶことはなかった<sup>270</sup>。

以上の概観から分かるように、少なくとも外交政策に関する限り、幾分楽観的ながらも鶴見は戦況の一進一退に一喜一憂している。即ち、基本的には剥き出しの力関係を重視する権力政治の論理が用いられており、最早かつての自由主義を思わせる思考様式は殆んどその後を留めていない。しかし、思想や内政について見てみると、そうではない箇所もあることが分かる。一つは自由主義者河合栄治郎<sup>271</sup>への一貫した極めて高い評価である。嘗て 1932 年に独逸で河合から相当詳細な社会科学・哲学についての個人講義を受けていた鶴見は 1944 年の河合の逝去を深く悼み、「彼の学殖、人物意力は将来戦後日本の指導者として最大の物の一人なりしに…。国に取りても、余一身に取りても一大打撃也<sup>272</sup>」と感じた。これは戦後の日本を自由主義的な国として再建することをこの時点で考え始めていたことを示すものと思われる。第二に挙げられるのは、議会政治への信頼である。第二章で述べたように、確かに鶴見はナチスやファッショの運動に強く惹かれたものの、それはあくまでも大衆運動としての側面を評価したに過ぎず、彼は「進歩せざる社会の支配の形式である<sup>273</sup>」独裁政治には断乎反対<sup>274</sup>であり、軍部の独裁政治に対する対抗手段としてはやはり政党の連携を考

---

<sup>266</sup> 同上昭和 19 年 1 月 23 日条

<sup>267</sup> 同上昭和 19 年 2 月 25 日条

<sup>268</sup> 清沢洌も宇垣を救国の指導者になりうるとして高く評価していた。『暗黒日記』昭和 18 年 9 月 26 日条

<sup>269</sup> 『鶴見祐輔日記 1938、1943、1944 年』昭和 19 年 8 月 24・30 日、9 月 14 日条

<sup>270</sup> 昭和 19 年 4 月頃に近衛文麿が宇垣との提携を考えていた事については、大蔵公望『大蔵公望の一生』（非売品、1959 年）130 - 1 頁に記述が見える。ほぼ同時期の近衛・宇垣の提携の噂については細川護貞『細川日記』上（中公文庫、1979 年）昭和 19 年 5 月 16 日条。

<sup>271</sup> 若い頃の河合の鶴見への傾倒とその後の両者の適度な距離感を保った親交については松井前掲論参照。

<sup>272</sup> 『鶴見祐輔日記 1938、1943、1944 年』昭和 19 年 2 月 16 日条。その他にも『鶴見祐輔日記 1939 年』昭和 14 年 1 月 8 日条など多数。

<sup>273</sup> 『欧米大陸遊記』477 頁

<sup>274</sup> 相当戦局が悪化している 1945 年の独逸降伏後終戦以前に書かれた「時局メモ 勝利獲得」（「鶴見文書 書類 419」）において、まだ日本の勝利は可能であるがそのためには国民の能力の総動員が必要であるとしつつも、それでもなお、ドイツの敗戦の原因として「独裁者可 誤断する時これを

えていた。状況に応じて揺れ続けた彼の議論の中で数少ない一貫した点がこの議会政治への信頼である<sup>275</sup>。しかし、彼の議会政治の理解についても、必ずしも国民を全面的に信頼していたわけではなく、国民を議員が指導するという側面により重点が置かれていたという限界は指摘できる<sup>276</sup>。

最後に、1945年の敗戦を鶴見はどのように受け止めたのだろうか。このことを考える際に先ず指摘されるべきことは、同じ親英米的政治家の中でも宇垣一成や幣原喜重郎らは終戦という事態を比較的冷静に受け止めた上で、連合国の間に早晚生じるであろう亀裂を利用することを考えたという事実<sup>277</sup>である。つまり彼らは今までの外交・政治についての思考枠組み自体が悪いとは考えず、その適用方法が間違っていたのだと認識していた。これと比較すると、鶴見の認識の極端な変化は特筆に値する。

まず鶴見によると、日本国民は先ず徹底的な敗戦を自覚することが必要であり、そのためには政府の文書などを積極的に公開することが必要だとされた。そして、そのうえでこの惨憺たる敗戦から立ち直り、国際社会に復帰するには従来の思考様式を完全に捨て去り、思考を一変しなければならぬ。そのためには第一に「ポツダム宣言の忠実なる履行」が必要であり、第二に「戦争なき世界国家建設への途であり、武力と経済力との上に、文化力を置く考へ方」で「国民を再教育し、新しき理想国の建設に邁進すること」が必要である<sup>278</sup>という。

以上の満州事変から敗戦までの鶴見の議論の変遷をたどって来て、どのようなことが言えるであろうか。容易に気付くのは、鶴見の思想が30年代に激しい動揺を繰り返した後、1945年の敗戦によって再び20年代のような理想主義<sup>279</sup>に帰っていったという点である。そしてそれは、現実の冷静な分析に基づいた理想主義ではなく、理念が先行している為はその理念と当座の現状分析との間のずれが孕む緊張関係をどのように克服していくべきなのかにについて考え抜かれていない観念的な

---

阻止し矯正する力なし 此れ専制政治の危険」を挙げている。議会を無視した独裁に如何に批判的だったかが分かる。

<sup>275</sup> 従って宇垣擁立もあくまで政民連携がその前提とされていた。

<sup>276</sup> 馬場恒吾・芦田均・斎藤隆夫・鶴見他「政党復活論の分析」『日本評論』昭和15年2月号では、芦田・馬場・斎藤らが、国民が原動力となる馬で政党はその国民の意向を代表する馬車だ、という見方をしているのに対し、鶴見のみは国民は寧ろ引かれる馬車であり、政党がこれをひっぱるのだという見方をしている。

<sup>277</sup> 渡辺昭夫編『戦後日本の対外政策』（有斐閣、1985年）10 - 1頁。

<sup>278</sup> 「草稿 敗戦日本の行くべき途」（「鶴見文書 書類 421」）

<sup>279</sup> 1922年4月27日付 H.G.Wells 宛鶴見祐輔書簡（「鶴見文書 書簡 445 - 343」）で、鶴見はナショナリズムを排して世界国家という思想を広げることが世界平和への途であるというウエルズのアイデアを絶賛し、これを広げるために努力していることを告げている。実際にもウエルズの著作の日本での翻訳・出版に関わったようである。

理想主義であった、という点でも恐らくは 20 年代への回帰であったと言えるように思われる。

本稿では紙幅の関係上、戦後の鶴見の言動について仔細に検討することはできないが、恐らく著名な 1954 年の参議院での自衛隊海外出動禁止の決議<sup>280</sup>の発議もこのような発想の延長線上にあるのではないかと推測される。

## おわりに

鶴見が希求した日本の対外膨張と国際協調との両立は不可能となり、日本はアメリカとの戦争に突入し、そして敗れた。結果だけから見れば彼の戦前戦中の政治生活は失敗であった。その原因の一半は、本人も認めているとおり、冷静に客観的な情勢を分析して目的をたてるのではなく、自らの主観的な目的を一度設定するとどこまでもそれで押し通そうとする頑固さにあった<sup>281</sup>。陸奥宗光のように官僚機構の中で上昇していくことで自分の政策論を実現することも、原敬のように政党を地道に強化していくことで権力の主体に入り込むことも彼は選ばなかった。その結果、政治や外交に影響力を与えたいと常に願いつつも長い浪人生活を余儀なくされた。そして政府にも議会にも足場をもたずに外交政策に影響を与えることは難しかった。ウェーバーの優れた政治家についての著名な定義<sup>282</sup>になぞらえて言うのならば、鶴見には溢れるばかりの「情熱」はあったものの、「判断力」や「堅い板に力をこめてじわじわと穴をくり貫いていく」用意周到な着実さが欠けていたように思われる。

既に本稿で見てきたように、鶴見の認識の甘さや不徹底を批判することは甚だ易しい。しかし、彼の日米協調への主観的誠意を疑うことは出来ないし、たとえ些か客観性を欠いていたとしても彼は国際的に日本の立場をよく説明し世論を説得させることに努力し、一定の成果をあげていた。戦前期は勿論のこと、現在においても、フォーリン・アフェアーズやタイムズを初め欧米の一流の新聞雑誌への度々の寄稿や欧米各地での数百回にのぼる講演をよくこなし、国際会議に頻繁に出席し、欧米各国の政治家・識者・文化人との間に太いパイプを持つ人物がどれだけいるであろうか。その意味で彼が半生を日米親善に捧げたというのは正しい。

ただ惜しまれるのは、彼には利害関係に基づいて国際関係の中での日本の国益を徹底的に考え抜く知性と、大局を見極める冷静な状況判断の力が欠けていた点である。そして、徹底した現実の力関係への認識を欠いていたことに加えて、しばしば中身の空疎な理念を重視する傾向があったため、例えば経済的な視点などからの大局的で根底的な批判を行なう事が出来ず、政府の外交方針を基本

---

<sup>280</sup> 田中明彦『安全保障』（読売新聞社、1997年）140 - 1頁。鶴見は発議理由を、自衛と侵略の区別は難しいが、日本は島国なので海外出動を禁じれば侵略をすることはないからと説明している。

<sup>281</sup> 「余の一生を通ずる欠点[は]...一事に専念すれどその努力可 数々Misguidedなる事、又、一方に専念してその努力自身につき反省なき為め也」『鶴見祐輔日記 1938、1943、1944年』（「鶴見文書・書類 3780」）昭和 18 年 11 月 25 日条

<sup>282</sup> マックス・ウェーバー著、脇圭平訳『職業としての政治』（岩波文庫、1990年）105頁

的には正当化する道を選ぶこととなったように思われる。従って鶴見和子が「戦争[いわゆる 15 年戦争]中の父の政治家としての態度は、けっして立派なものではなかった」と考え、米内内閣の政務次官就任や大政翼賛会入りを根拠に「公人としての父は、自由主義を説いたが、おこないはべつであった」ことを批判した<sup>283</sup>のは一応は首肯できる評価である。しかし、既に指摘してたように鶴見自身は決して軍の強硬派にいつも追随していた訳ではないし、翼賛会に入った後も代議士の力をあわせることによって日本の逸脱を何とか矯正して、膨張と国際協調の適正な接点を見出そうと一貫して努めてきた。

以下、同時代の他の自由主義者と簡単に比較しながら鶴見の自由主義の特質について何点か指摘することで本稿の結びとしたい。

第一に、鶴見には清沢冽や石橋湛山のように政治や外交を経済的な尺度からみる観点が乏しかったため、たとえ満蒙及び中国北部に生存圏を確保しても、一番の得意先である英米との関係を悪化させては差し引きマイナスであるという大局的な判断が出来なかった。より正確に表現すると、英米との関係の重要性は分かっていたが、英米との協調と膨張の両立可能性を過信しすぎたといえるかもしれない。

第二に、鶴見は、吉野作造において典型的に見られたようなりベラリズムへの宗教的な確信<sup>284</sup>の裏付けを欠いていた。その結果、中国ナショナリズムや国際連盟に対してかつては機能だけでなく理念としても高い評価を与えたのに、一度それが機能不全に陥ったり、日本の国益に反すると考えた場合には容易に評価が逆転してしまう結果となった。

第三に、おそらくこれが最大の問題点であると思われるが、対米関係の見方が楽観的に過ぎたように思われる。その理由は彼がアメリカ外交の実益重視と道徳重視の二つの側面のうち後者を過度に軽視した点にある。巧みな講演術によって 30 年代においてもそれなりに米国の聴衆を納得させることが出来た事及び欧米の識者に知人が多く、親日的な意見を聞く機会があったことがこれを助長したのかもしれない。

第四に、しかしながら以上の否定的評価にも関わらず、依然として鶴見は自由主義を少なくとも部分的には抱き続けたが、それは主として議会政治に関連する点についてであった。自由を重視して独裁政治を憎み、個人の人格の自由な発達こそが社会の発展をもたらすと考える点で彼は一貫していた。学生の時以来数十年間、何よりも「雄弁家」として自らを形成してきた鶴見にとって、弁論で国を動かす議会政治という政治体制はまさに彼の政治的人格の根幹に関わるものであり、最後まで彼がこれを支持しつづけたのはその意味で当然であったといえる。

第五に、鶴見というよりは自由主義者全般についていえることであるが、自由主義的政策を訴え

---

<sup>283</sup> 鶴見和子前掲論文 350 - 1 頁

<sup>284</sup> 三谷太一郎「解説 晩年の苦闘」『吉野作造選集』第 15 巻（岩波書店、1996 年）

て大衆を動かそうとした鶴見の政治運動が挫折したことに典型的に現れているように、戦間期の日本の自由主義者は国民の大多数と相当距離がある存在だったと思われる。30年代に満蒙權益や東亜新秩序の建設が日本の「生命線」であるとする近視眼的な議論が影響力を持ち、清沢冽や石橋湛山の現在から振り返ると合理的と思われる批判が支持を得られなかったのは、結局国民の多くが前者の方に説得力があると考えた、少なくとも後者を積極的には支持しなかったからではないだろうか。

## 参考文献リスト

### 1 鶴見の著作

#### 論文

- 「海外放資と戦争との関係」『法学協会雑誌』27(5)明治42年
- 「南洋と日本民族」『帝国鉄道協会会報』17(2)大正5年
- 「ウィルソン論」『中央公論』大正6年3月号
- 「猶太人独逸人排斥の原因を論じて世界に於ける排日感情の台頭に及ぶ」『帝国鉄道協会会報』23(2)大正11年
- 「断想」『時事新報』大正13年2月頃
- 「ウィルソン逝く」『改造』6(3)大正13年
- “The Difficulties and Hopes of Japan” *Foreign Affairs* vol.3. Dec.15,1924
- 「現代米国が暗示する日本の新国策」『エコノミスト』4(1)大正15年
- 「米国の近勢」『外交時報』510号大正15年
- 「国際的精神の浮沈」『国際智識』大正15年4月号
- 「天下を動かす大雄弁」『キング』大正15年4月号
- 「人口問題の解決策」『経済往来』大正15年7月号
- 「国民外交の誕生」『キング』1926年10月24日号
- 「後藤子の政治倫理化運動」『社会経済体系』昭和1年12月
- 「ルビコンを渡る心」『実業之日本』昭和2年1月
- 「若き人々の一群」『経済往来』昭和2年2月号
- 「奇怪なる三党首の妥協と国民の深恨」『改造』9(3)昭和2年
- 「昭和時代の国民的目標」『実業之日本』昭和2年4月15日号
- 「支那の動乱と米国」『改造』9(5)昭和2年
- 「若槻首相辞職の時期」『中央公論』昭和2年5月号
- 「党責なき選挙人」『我観』41号昭和2年
- 「政治といふ観念」『太陽』33(12)昭和2年
- 「外交座談会」『文藝春秋』昭和2年12月号
- 「壇上より観た現代の大衆」『中央公論』昭和3年4月
- 「一筋の道を歩む心」『キング』昭和3年5月
- 「新自由主義の立場より」『改造』10(5)昭和3年
- 「女子公民権賦与について」『都市問題』7(3)昭和3年

- 「国際人と文人と政治家」掲載誌不明昭和3年9月12日付け
- 「我が日本の目標は太平洋の平和にあり」掲載誌不明昭和3年11月
- 清沢冽・鶴見祐輔他「アメリカ及びアメリカニズム批判」『新潮』昭和4年6月号
- 「宇垣一成論」『改造』昭和4年7月号
- “Japan in the Modern World” *Foreign Affairs* vol.9 Jan.1931
- 「満州問題に対する欧米の論調」『外交時報』昭和8年3月号？
- 「米国の現状及びその対日思潮解剖」『改造』15(2)昭和8年
- 「欧米雑感 世界は今何を考えているか」『実業之日本』昭和8年2月号
- 「テクノクラシ とは」『中央公論』昭和8年2月号
- 「ローズヴェルトの極東政策」『中央公論』昭和8年4月号
- 「米国の危機」『文藝春秋』昭和8年4月号
- 「満州問題を中心として見たる世界の対日感情(1)(2)」『南洋協会雑誌』19(4・5)昭和8年
- 「新渡戸先生の追憶」『国際知識』13(12)昭和8年
- 「国際平和と国民正義」『東洋経済新報』昭和8年6月10日
- 「議会政治論」『政界往来』昭和8年5月
- 「非常時の英雄ビスマーク」『キング』昭和8年5月号
- 蠟山政道・長谷川如是閑・芦田均・清沢冽・田川大吉郎他「日米親善問題座談会」『東洋経済新報』昭和8年6月24日号
- 「太平洋会議と満州問題」『支那』昭和8年12月
- 「太平洋会議の論戦」『中央公論』昭和8年11月
- 「新渡戸稲造博士の思ひ出」『実業之日本』昭和8年11月1日号
- 「太平洋会議と満州問題（加奈陀パンフに於ける）」『支那』昭和8年12月
- 「太平洋上の勢力均衡」『政治経済時論』昭和9年4月号
- 「日米親善物語」『中央公論』昭和9年5月号
- 「太平洋に於ける日本の地位」『外交時報』69(5)昭和9年
- 「後藤新平論」『中央公論』昭和10年4月号
- 「梟雄アドルフ・ヒトラー」『中央公論』昭和10年5月号
- 「太平洋上に於ける英米露と日本」『雄弁』昭和10年8月
- 「日米交換教授時代の新渡戸先生」故新渡戸稲造博士記念事業実行委員会編『新渡戸博士追憶集』1936年
- 「見てきた欧米の現状を語る座談会」『日本評論』昭和12年2月号
- 「宇垣一成の心境」『中央公論』昭和12年3月号
- 「速に外交方針を確立せよ」『民政』昭和12年4月号



「ヨセミテ会議の価値」『太平洋問題』日本国際協会、昭和12年6月

「米国は支那事変に干渉するか」『太平洋』昭和13年12月号

「米国の対日感情とその東洋政策並に英国の現況」『民政』昭和14年1月号

「日本を中心とする国際外交(上・下)」『民政』昭和14年11・12月号

「アメリカの世論」『中央公論』昭和14年12月号

馬場恒吾・芦田均・斎藤隆夫・鶴見他「政党復活論の分析」『日本評論』昭和15年2月号

「ルーズベルト大統領の独裁的地位」『太平洋』昭和16年3月号

「我が太平洋政策の根本義」同上

「太平洋をめぐる政治外交関係」[『太平洋問題の再検討』朝日新聞社1941年7月所収]

「世界史は転回す」『太平洋』昭和17年1月

「南方対策論」『太平洋』昭和17年2月号

「濠州大陸の暗示」『太平洋』昭和17年4月号

「濠州を解剖する」『南方旅行記』日本放送出版協会、1942年

「支那事変5周年を迎えて」『太平洋』昭和17年6月号

「総論」太平洋協会編『濠州の自然と社会』中央公論社、1943年

「ウィルソンとその夫人」『伝記物語十二人の肖像画』雄鶏社、1947年

「交友三十三年」『河合栄治郎伝記と追想』社会思想研究会出版部、1948年

長谷川如是閑・丸山真男・荒畑寒村・鶴見他「日本の運命(1)日露戦争前後」『世界』昭和1950年2月号

同上「日本の運命(2)興敗の岐路」『世界』昭和1950年3月号

「新渡戸稲造先生」『我が師を語る』社会思想研究会出版部、1951年

「日本はアジアの孤児となるか」『文藝春秋』昭和1953年4月号

「訪問記」方紀生編『周作人先生のこと』光風館、1954年

「社交」『生活の智恵』社会思想研究会出版部、1951年

『実業之日本』に昭和34年11月まで115回に渡り、随想評論を寄稿  
単行本(政治関係のもののみ)

『南洋遊記』大日本雄弁会、1917年

『米国民性と日米関係の将来』岩波書店、1922年

『偶像破壊期の支那』鉄道時報社、1922年

『鶴見祐輔氏大講演集』大日本雄弁会講談社、1924年

『思想・山水・人物』大日本雄弁会、1924年

『現代日本論』(沢田謙訳)大日本雄弁会講談社、1927年8月

『北米遊説記』大日本雄弁会講談社、1927年7月

- 『中道を歩む心』講談社、1927年11月
- 『英雄待望論』大日本雄弁会講談社、1928年
- 『日本と世界』名著普及会、1982年（アルス社、1929年の復刻）
- 『太平洋時代と新自由主義外交の基調』新自由主義協会、1929年
- 『現代米論』日本評論社、1931年
- 『欧米大陸遊記』大日本雄弁会講談社、1933年
- 『膨張の日本 新英雄論』大日本雄弁会講談社、1935年
- 『風雲の坩堝エチオピア!』（駒井重次との共著）ヤシマ書房、1935年
- 『後藤新平』後藤新平伯伝記刊行会、1937-8年
- 『米国の支那事変観とその苦悩』日本外交協会、1939年1月
- 『太平洋上の日米問題』（沢田謙との共著）青年書房、1941年
- 『新雄弁道』大日本雄弁会講談社、1941年
- 『太平洋問題と大東亜の建設』（本田位祥男との共著）川崎商工会議所、1942年

## 2 同時代の言説

- 清沢冽「満州に於ける『特殊地位』と日本の行くべき道」『外交時報』1926年1月5日号
- 吉野作造「後藤子爵の新運動」『中央公論』大正15年5月号
- 同「新自由主義の提唱」『中央公論』大正15年6月号
- 同「自由主義提唱の弁」『中央公論』大正15年8月号
- N・ペンリントン「外国記者の我が総選挙観（1）活殺の剣を握る少数党」『中央公論』昭和3年4月号
- 馬場恒吾「特別議会で将来の政情」『中央公論』昭和3年6月号
- 横田喜三郎「満州事変と国際連盟脱退」『帝国大学新聞』1931年10月5日
- 蠟山政道・芦田均・三浦鉄太郎・赤松克麿他「1936年の見透と其の対策に就て語る」『東洋経済新報』昭和8年10月18日
- 立作太郎「連盟脱退と国際法」『国際法外交雑誌』32巻4号、1933年
- 美濃部達吉『議会政治の検討』日本評論社、1934年
- 「米内内閣の性格」『民政』昭和15年2月号
- 山法師「組閣裏面と閣僚」『日本評論』昭和15年2月号
- 蠟山政道「大東亜広域圏論」太平洋協会編『太平洋問題の再検討』朝日新聞社、1940年
- 清沢冽『暗黒日記』第1・2巻評論社、1970-1973年

## 3 先行研究

## 鶴見祐輔関連

XYZ「鶴見祐輔論」『日本評論』昭和2年8月

阿藤俊雄「鶴見祐輔氏」『昭和巨人録』大日本精神団出版部、昭和3年

「ヤンキー・ガールに大もての鶴見祐輔君」『実業時代』昭和3年4月号

渡辺貴知郎『議政壇上を直視して』普選徹底会出版部、昭和4年

「町の人物評論 鶴見祐輔」『中央公論』昭和12年3月号

阿部真之助『現代日本人物論』河出書房、1952年

沢田謙「鶴見祐輔論」『現代人物伝シリーズ』第一集、銀河出版、1963年

北岡寿逸編『友情の人 鶴見祐輔先生』非売品、1975年

藤野正「昭和初期の「自由主義者」 鶴見祐輔を中心として」『日本歴史』415号、1982年

鈴木麻雄「鶴見祐輔の対米観」『法学政治学論究』第6号、1990年

松井慎一郎「鶴見祐輔と川合栄治郎 交友三十三年」『文学研究科紀要』44、第4分冊1998年

上品和馬「鶴見祐輔の「宣伝」活動」『渋沢研究』15号2002年

上品和馬「鶴見祐輔の中国論」『アジア文化研究』第10号2003年

片桐庸夫『太平洋問題調査会の研究』慶應義塾大学出版会、2003年

## 外交

Ann Trotter, *Britain and East Asia 1933-1937* Cambridge University Press, 1975

北岡伸一「ワシントン体制と「国際協調」の精神」『立教法学』23号、1984年

石射猪太郎『外交官の一生』中公文庫、1986年

酒井哲哉「「英米協調」と「日中提携」の間」『年報近代日本研究』第11号、1989年

酒井哲哉「東亜新秩序の政治経済学 高橋亀吉の所論を中心に」『国際政治』97号、1991年

入江昭著・篠原初枝訳『太平洋戦争の起源』東大出版会、1991年

佐藤誠三郎「協調と自立の間」「死の跳躍」を越えて」都市出版、1992年（初出1969年）

加藤陽子『模索する一九三〇年代』山川出版社、1993年

井上寿一『危機のなかの協調外交』山川出版社、1994年

照沼康孝「拳国一致内閣期の民政党的外交政策」『年報近代日本研究』17号、1995年

ジョン・V・A・マクマリー原著、アーサー・ウラルドロン編著、衣川宏訳、北岡伸一監訳『平和はいかに失われたか』原書房、1997年

塩崎弘明「外務省革新派の現状打破認識と政策」『国内新体制を求めて』九州大学出版会、1998年

G. John Ikenberry, *After Victory*, Princeton University Press, 2001

武田知己『重光葵と戦後政治』吉川弘文館、2002年

井上寿一『日本外交史講義』岩波書店、2003年

## 政治

岡義武『近代日本の政治家』岩波現代文庫、2001年（初出1960年）  
三谷太一郎『日本政党政治の形成』東大出版会、1967年  
伊藤隆『昭和初期政治史研究』東大出版会、1969年  
高橋正衛『昭和の軍閥』中公新書、1969年  
三輪公忠『松岡洋右』中公新書、1971年  
岡義武『近衛文麿』岩波新書、1972年  
北岡伸一「陸軍派閥対立（1931～35）の再検討」『年報・近代日本研究』一号山川出版社、1979年  
升味準之輔『日本政党史論』第6・7巻東大出版会、1980年  
斎藤隆夫『回顧七十年』中公文庫、1987年  
北岡伸一『後藤新平』中公新書、1988年  
酒井哲哉『大正デモクラシー体制の崩壊』東大出版会、1992年  
渡辺行男『宇垣一成』中公新書、1993年  
筒井清忠『昭和期日本の構造』講談社学術文庫、1996年（初出1984年）  
三谷太一郎「天皇機関説事件の政治史的意味」『近代日本の戦争と政治』東大出版会、1997年  
M・ゴードン・バーガー著・坂野潤治訳『大政翼賛会』山川出版、2000年

#### 戦前の自由主義について

高木信雄「リベラリスト人国記」『中央公論』昭和8年4月  
鶴見俊輔「日本の折衷主義 新渡戸稲造論」『近代日本思想史講座』第三巻、筑摩書房、1960年  
緒方貞子「国際主義団体の役割」『日米関係史』第1巻東大出版会、1971年  
三谷太一郎「国際環境の変動と日本の知識人」『日米関係史』第4巻東大出版会、1972年  
三谷太一郎『新版 大正デモクラシー論』東大出版会、1995年（初出1974年）  
太田雄三『<太平洋の橋>としての新渡戸稲造』みすず書房、1986年  
北岡伸一『清沢列』中公新書、1987年  
石田雄「昭和初期の「自由主義」論議」『日本の政治と言葉』（上）東大出版会、1989年  
北岡伸一「新渡戸稲造における帝国主義と国際主義」『近代日本と植民地』第四巻岩波書店、1993年  
増田弘『石橋湛山』中公新書、1995年  
三谷太一郎「解説 晩年の苦闘」『吉野作造選集』第15巻岩波書店、1996年  
加地直紀「国際協調論者田川大吉郎における対外認識の矛盾」中村勝範編『満州事変の衝撃』勁草書房、1996年  
御厨貴『馬場恒吾の面目』中央公論社、1997年

#### 太平洋問題調査会

中見真理「太平洋問題調査会と日本の知識人」『思想』1985年2月

片桐庸夫「太平洋問題調査会（IPR）と政治的勢力均衡及び平和的調整問題 第六回ヨセミテ会議  
を中心として」『社会科学討究』43（1）、1997年

#### 4 一次資料

鶴見祐輔関係文書（国立国会図書館憲政資料室所蔵）

日記、会見メモ、政策案、書翰に有用な資料を含む。

##### 書類の部

- 17 「政友会と民政党との対支政策と余の立場」1928年
- 32 「首相及び外相に対する質問演説」1937年1月～2月「旧稿」と「新稿」
- 131 「政治的に歩むべき道」1928年7月27日
- 149 「明政会抱込事件に関する声明書」1930年3月14日
- 171 「立候補すべきや否や」1929年8月18日
- 201 「新政治運動に関するメモ」1930年5月20日
- 204 「民政党改造私案」1937年
- 208 「明政会抱込事件関係新聞切抜」
- 236 「新日本建設の要諦」1945年9月初め
- 268 「講演メモ 日米関係の過去現在と米国民性」1953年5月30日
- 299 「メモ Liberalism」1926年3月25日
- 302 「Liberalismの研究」1927年2月18日
- 316 「後藤伯没後の政治的結成」（1929年4月20日）
- 320 「日米問題根本的解決私案」1920年代後半？
- 336 「メモ Lytton Report&Japan」1932年11月21日
- 340 「講演メモ Japan's Political Interests in China」1932年か
- 341 「非常時日本を論ず」1933年9月2日
- 343 「連盟脱退と日米協調」1933年6月以降
- 344 「日本国策研究の指導原理」1934年10月4日
- 345 「『理想社会』運動計画メモ」1935年1月22日
- 346 「メモ新聞経営私案」1935年6月28日
- 347 「メモ米国に於ける日本に関する疑問」1935年12月22日
- 348 「外交問題研究方針」1936年5月31日
- 350 「支那の Reconstruction の obstacles」1936年9月11日
- 351 「政局メモ」1936～1937年1月の間
- 359 「支那事变説明の根本要旨」

- 360 「Munich Accord の observation」1938 年 10 月 1 日
- 363 「メモ欧州動乱と日米関係」1939 年 9 月 12 日
- 373 「世界情勢と日米政局見透し」「根本国策」1941 年 7 月 20 日
- 374 「日本の平和か米国的平和か」1941 年 10 月 18 日
- 375 「草稿 世界統一について」1941 年 10 月 18 日
- 379 「昭和 17 年の計画」1942 年 1 月 1 日
- 380 「メモ大東亜共栄圏内の新秩序」
- 387 「戦争目的論」1943 年 5 月 1 日
- 419 「時局メモ 勝利獲得」1945 年終戦以前
- 421 「草稿 敗戦日本の行くべき途」
- 425 「メモ ファシズム、ファシストについて」
- 497 「宇垣一成氏との会見」1928 年 8 月 3 日
- 498 「千葉亀雄・高橋亀吉」1929 年
- 500 「会見メモ 1930 年 4 月～5 月」「吉田茂次官」1930 年 5 月 12 日他に同時期の山本条太郎、岩永祐吉、堀田欧米局長等
- 501 「面談メモ 天羽君談 外務省最近の仕事」1935 年 10 月 12 日
- 506 「欧州旅行中会見メモ」「Sir Frederick Leith Ross との会見」1936 年 10 月 27 日
- 516 「米内首相との会談」1940 年 2 月 28 日
- 521 「松岡外相会見メモ」1941 年 6 月 26 日
- 523 「会見メモ 田中新一中将」1941 年 10 月 30 日
- 524 「会見メモ 一宮房次郎」1941 年 11 月 25 日
- 743 「太平洋政策研究会 構想メモ」1938 年 12 月 27 日
- 763 「日米国交調整案」1939 年 12 月頃?
- 773 「日米太平洋協約案」1939 年
- 783 「メモ対米宣伝について」1943 年 8 月 3 日
- 830 「新自由主義協会の一大転向」1930 年 12 月 24 日
- 1232 「講演メモ Japan's stand in Manchuria」1931 年 10 月 28 日
- 1590 「綿花の件報告電文草稿」1938 年
- 1614 「鶴見祐輔書簡(控)新渡戸稲造宛」1932 年 4 月 23 日付
- 1908 「講演メモ 若し日本が対英米開戦せざりしならば」1947 年 2 月 8 日
- 1931 「満州事変の真相と上海事変」1932 年井上(準)暗殺後
- 2029 「What Japan thinks about the I.P.R.」1931 年 4 月 22 日
- 2033 「What Japan thinks about Kellog Pact」1931 年

- 2912 「後藤新平「政治の倫理化」運動に関する計画メモ」1926年
- 2934 「世界の情勢と日米関係」(1941年7月～12月の間)
- 3771 「日記1930」
- 3772 「日記1931」
- 3773 「日記1932」
- 3774 「日記1933」
- 3775 「日記1934」
- 3776 「日記1935」
- 3777 「日記1936」
- 3778 「日記1937」
- 3779 「日記(英文)1938、1942」
- 3780 「日記1938、1943、1944」
- 3781 「日記1939」
- 3782 「日記1939、1945」
- 3783 「日記1940」
- 3784 「日記1941」
- 3884 「会見筆記メモ」1930～32年。(小磯国昭、横田喜三郎、伊東巳代治、小山完吾、奥村外事課長、大蔵公望、森島守人、駒井徳三、大橋忠一、石射猪太郎他)
- 3885 「ノート(会見録、構想メモ)」「再度の黒船来」1939年11月20日、「日支事変解決案」1937年12月26日、「露西亜に関する観察」1938年11月3日、「各国大観」1938年11月4日他

#### 書翰の部

- 18 芦田均書翰
- 87 岩永祐吉書翰
- 199 河合栄治郎書翰
- 319 沢田謙書簡
- 445 鶴見祐輔書翰
- 485 永田秀次郎書簡
- 514 新渡戸稲造書翰
- 529 野間清治書簡
- 598 前田多門書簡
- 767 Charles A.Beard 書簡
- 1014 池田長康書簡

1023 宇垣一成書翰

1029 尾崎行雄書簡

特に池田書簡・前田多門書簡については点数が多く、残念ながら全てを仔細に検討することは出来なかった。本稿で利用していない有用な情報が含まれている可能性がある。また、欧文書簡についても目ぼしいもののみ一瞥したのみなので、欧米での鶴見の活動の実態を伝える情報が含まれている可能性も否定できない。